

筑波大学 社会国際学群 国際総合学類
卒業論文

インド社会とダイエット
2012 年 1 月

氏名：堀江香世
学籍番号：200819008
指導教員：関根久雄

目次

第1章 序論	1
1. 問題意識・問題設定	1
2. 研究方法・研究目的	4
第2章 ダイエットの概要と歴史	7
1. ダイエットの概要と位置づけ	7
2. 女性とダイエット	11
3. 近代社会におけるダイエットをめぐる問題	13
第3章 歴史的背景から探るインド人女性	17
1. はじめに	17
2. インド人女性はなぜダイエットをするのか	18
(1) 食文化	21
(2) 運動	24
3. 宗教と女性	25
(1) 宗教の歴史的背景	26
(2) ヒンディー教とカースト制度	29
4. 家族と自己形成	33
5. 身体の帰属意識	35
第4章 結論	37

図目次

図1 アンケート回答者の信仰宗教	4
図2 アンケート回答者の母国語	4
図3 ダイエットの周辺	9
図4 ダイエット経験はあるか	20
図5 自分の体型に満足しているか	20
図6 宗教的な理由でダイエットをするか	21

図 7 菜食主義か -----	22
図 8 アーユルヴェーダをしたことがあるか -----	23
図 9 ダイエット方法 -----	24
図 10 カースト制度 -----	29

表目次

表 1 所得層 -----	4
表 2 インド人口 -----	4
表 3 本論の考察対象 -----	4
表 4 象限の説明 -----	9

Appendix -----	39
----------------	----

参考文献 -----	48
------------	----

Summary -----	52
---------------	----

謝辞 -----	57
----------	----

第1章 序論

1. 問題意識・問題設定

インド国民の生活は、1990年代から経済成長期に入り大きく変わってきた。特に中間所得層と富裕所得層（以下、中間層、富裕層）の若い女性を中心に、「美」、「食」、「運動」と「健康」に対する価値観や考えが変化してきている。その変化の一つに「ダイエット」が挙げられる。大学進学や社会進出を果たした中間層のインド人女性を中心に、ダイエット、エステ、フィットネスが過熱している。近年のインドの女性ファッション雑誌にはインドの映画女優のライフスタイルをモデルに、やせる方法の特集がされたり¹、ホテルや都市部には次々とスポーツジムが建設されたり、食品店では低カロリーの食品も販売されたりしている。1960年代にアメリカで起きたダイエットとフィットネスのブームは徐々にインドに広がり、若いインド人女性は西洋的なモデル体型に憧れを持つようになった。1980年代頃からアメリカで映画俳優やセレブリティがダイエット方法としてインド式ダイエットを取り入れたことから、インドに昔からあるヨガやアーユルヴェーダ²も見直されるようになった。このように世界の中でもインド人がダイエットの必要性を感じている比率は非常に高い。アメリカの総合ファミリー雑誌が行ったダイエットに対する意識調査では、対象国の世界16ヶ国の中でインドはダイエットの必要性はあるかという項目で、2番目³に高い数値を示している⁴。このようなダイエットをするインド人女性の増加の背景には、1990年代の経済開放政策、経済成長による中間層の増加と女性の社会進出の影響がある。

インドは1980年代に経済自由化政策が実施され、1990年代以降は物だけでなく人

¹ インドの主要な女性雑誌：Femina, Filmfare, Hello, Good Homes and Grazia、これらの5つ女性雑誌をまとめてとりあげる総合サイトより参照。

² インド医学の一種。サンスクリット語で生命の知識・科学という意味。

³ アメリカの総合ファミリー雑誌の『リーダーズ・ダイジェスト』が2010年に世界16ヶ国、1万6千人を対象にしたダイエットに関する意識調査。対象国は、フィリピン、アメリカ、英国、インド、オーストラリア、オランダ、カナダ、中国、ドイツ、ハンガリー、フィンランド、フランス、メキシコとロシアである。インド人の68%がダイエットは必要だと答えている。1位はブラジル(83%)、3位がアメリカ(62%)、4位はフランスと英国(55%)、6位はオランダ(54%)、7位はフィリピン、オーストラリア、カナダ(53%)という結果になっている。

⁴ [リーダーズ・ダイジェスト 2010] “Global poll a look at weight around the world” February, 2010.

<http://www.rd.com/health/global-poll-a-look-at-weight-around-the-world/>

や企業がインド市場に参入するようになり、活発な経済貿易は物の輸出入だけでなく同時に海外の文化も共有されるようになった。2001年にはインドで物の輸入数量規制がほぼ全面的に撤廃され⁵、それでは道で売られているフルーツや衣服も海外から輸入されたもので溢れている。インドの経済成長に伴い、今まで以上にインド人の購買意欲が高まっている。その中心になっている人々が貧困から抜け出した中間層で、世界中の企業が商品を売り込もうと激しい戦いをインド市場で繰り広げている。

2000年代に入りインドの経済成長はより勢いを増していき、アメリカの証券会社、ゴールドマン・サックス社が2003年10月に”Dreaming with BRICs: The path to 2050 (BRICsと共に見る2050年への道)”という投資家向けのレポートで初めてBRICsという名を示して以来、世界の注目はインドの経済成長だけでなく文化に向けられるようになった。海外から多くの企業がインド市場に参入し、インド全体にあまり普及していなかった家電や車が中間所得層向けに低価格で販売され、自動車に乗りテレビを見ながらナイフとフォークで洋食を食べるといった西洋的な生活に変わっていった。また、2005年から3年連続で日本のGDP成長率の4倍にもあたる9%以上を維持し[経済経局開発機構 2007]、2008年の金融危機直後は一時急落したが、2010年には10.4%を記録している[World Factbook 2010]。このようにインド国民の生活が豊かになりつつあることもあり、ドイツの金融会社のドイツ銀行が2010年2月に発表したインドの中間層⁶に関するレポートによると2007年には5%弱だった中間層と富裕層の割合が、2011年にはインド総人口の約30%にもおよんでいると予測している[Douche bank reseach 2010]。

経済開放以前、インドで入手できる食料や服と化粧品の種類は非常に限定されており、粗悪な国産品または高額な外国製品という極端な品揃えであった[岡光 2009]。そのため、ほとんどの女性はインドの民族衣装のサリーやパンジャビスーツを日常着としていた。サリーはどんな体型の人でも着られるデザインで、かつてはそのサリーからおなかの肉がはみ出しているような豊満な女性が魅力的とされていた。しかし、現在ではその美の価値観は変わってきている。近年のインド人の生活や価値観の変化

⁵ 『インドの経済成長』環太平洋ビジネス情報 RIM 2009 Vol.9 No.33。

<http://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/report/rim/pdf/2735.pdf> [環境太平洋戦略研究センター 2009]

⁶ インドの中間層 原名: “Middle class in India” 2010年2月15日

http://www.dbresearch.de/PROD/DBR_INTERNET_DE-PROD/PROD00000000000253735.pdf [Douche Bank 2010]。

は筆者がインドで過ごした 2003 年から 2008 年の間にも見る事が出来た。どんな体型の人でも着ることができたサリーやパンジャビスーツも体にぴったりするデザインのものが増え、ジーンズ姿の女性をよく目にするようになった。アメリカの雑誌や映画を通じて自らが生まれ育った社会と違う価値観に触れることによって、インド人女性は改めて自分自身の身体を見直すきっかけとなっていることが見受けられた。特に女性の身体は男性とは違い、初経、出産や更年期などのライフステージに応じて変化する。そのたびに女性は変化を実感し、自らの身体を見つめる機会が与えられる。

ダイエットというのは、単に健康的な体型維持や食生活の問題にすぎないと思われがちだが、ダイエットと文化は密着に関係している。「美」は歴史的なものであり、文化として形成されてきたからである[石田 2005: 292]。インドだけでなく、世界で理想とされる体型は欧米的なモデル体型になってきている。そのため、単一の「美」の基準が従来の基準を持ったインド社会に浸透することによって、他人との比較において、自分が他人より劣っているという劣等感や発育過程の支障が生まれてくるだけでなく、社会の固有なライフスタイルが失われつつある。特に、ふくよかな身体が長年「美」とされてきたインドでの変化は著しい。ダイエットを指向する動きは、一見すると、インド社会に昔からある「美」に逆行しているように見える。また、この数年の「西洋化」が「伝統文化」を脅かしているという感覚を起こさせる。しかし、経済成長や女性の能力の向上等の動向に合わせて、身体も社会と同様に変化しているのではないだろうか。

女性が教育を受けるのは、将来彼女らが経済的に自立するために必要であるという考えが主流になってきている。それはインド政府の女性の経済的自立の向上を目的とした国際組織や NGO⁷の受け入れや、有償資金協力という政策に反映されている。インド社会で女性らしく生きることと、男性と同じように勉強し働くことの狭間に生きている。かつては男性に独占されていた専門職や管理職に都市の中間層の女性が多く参入できるようになったことで、文化的な懸念が生じているのだ。貧しい農村部のコミュニティでは今でも 13 歳が女性の結婚適齢期とされているが、女性は女らしく振る舞い、結婚して夫に尽くすものという考えは中間層や富裕層の家庭でもいまだに残っている。このように「主体的であれ」、「主体的ではあってはならない」という矛盾する規範が同時に働いており、主体性に関わる規範の構造の中に矛盾が存在している[加

⁷ インド政府では UNDP (国産開発計画) や SEWA (Self Employed Women's Association) と協力し、女性たちの経済的自立 (エンパワーメント) を支援している。

藤 2004: 102]。第3章で触れるインドに古くから受け継がれている宗教観などがその例である。ジェンダー役割の変化は文化の荒廃や喪失の兆候であるかのような反応を引き起こした[ナーラヤーン 2011:10]。

今日の社会を生きるインド人女性は誰もがこのような矛盾の働く立場に置かれている。主体性、女性性、身体性について矛盾する規範が同時に働く場におかれ、どちらの規範に従っても他方から非難されるという引き裂かれた状態のなかにある [加藤 2004: 6]。女性たちの様々な条件が重なることで、社会の規範のなかで人一倍困難な状況にいたってしまい、ダイエットに導かれたのではないだろうか。これらの矛盾する規範が同時に働く社会におかれ、自らの身体を変えることでメッセージを発信しようとしているのは、拒食症や過食症などの摂食障害の女性たちに限られるわけではない。

本論では、インド社会とダイエットを論じるにあたって、特に宗教の歴史的背景、食生活及び健康と美意識の文化的背景に注目し、身体と社会の関係を明らかにする。ダイエットを施行する女性の心境には何があるのかを、彼女らのもっとも身近にある家族という社会的集団から読み解いていく。インドでのあらゆる特定の社会の変化が西洋化やグローバリゼーションの表れと片付けられたりする一方で、その他の無害、または変化しつつある文化は守るものと見なす、流動的なインド社会の動きに、ダイエットを通して具体例を挙げながら考察する。

2. 研究方法・研究目的

本論は、インド人の健康や食と美に関する文献、報告書、新聞記事、雑誌記事、ウェブサイトや論文から得られる情報をもとに、インド社会におけるダイエットの在り方を考察する。本論のキーワードとなる、社会、ダイエット、近代化、家族の4つを、歴史的背景にそって順次説明していく。また、インターネット上の匿名質問紙法とインタビュー調査も適宜用いることとする。回、研究の考察対象は2011年現在で、主に10代後半～20代インド人女性とした(2011年現在)とする。対象条件は、文字が読めてインターネットが使用可能な環境にある中流所得層から富裕所得層のインド人女性(表1参照)とする。インド社会とダイエットに関する調査は2011年の9月1日から11月2日の間に行った。筆者が中学と高校時代を過ごしたインドの友人と彼らの友人および本学のインド人留学生に依頼した。匿名質問紙法の回答者31名(平均年齢23

歳)を分析対象とする。結果はすべて統計処理を行い、個人が特定できないこと、結果は本論の研究目的以外には使用しないことを説明し、協力を得た。

表 1. 所得層の表

低所得層	40 ルピー以下の日給
中間層	20 万ルピーから 100 万ルピーの年収
富裕層	100 万ルピー以上の年収

1 ルピーは 1.49 円／換算 2012 年 1 月 15 日現在

(2010 年 ドイツ銀行グループの報告書より抜粋)

質問紙の項目は、50 問で回答者の属性（年齢、出身地、母国語、宗教）に関する 3 項目、ダイエット経験の有無に関する 1 項目、自身の形成に影響があった事柄に関する 1 項目、食生活に関する 1 項目の計 6 項目からなる。

インド社会とダイエットに関するアンケートに答えてくれた 31 名の年齢構成は、10 代 5 名、20 代 24 名、30 代 1 名、40 代 1 名からなる平均年齢 23 歳のインド人女性であった。そのうち 25 名が学生、アルバイトが 1 名、4 名が社会人、主婦が 1 名である。インド全人口と比べると回収できたアンケートは 31 名と微々たるものであるが、様々な背景の女性が参加してくれた。14 州の異なる地域から、様々な宗教を信仰し、11 言語の言語を話す女性たちのデータを得ることができた。

表 2. インド人口

人口	12 億 4119 万人
男性	6 億 5472 万人
女性	6 億 747 万人

表 3. 本論の考察対象人口

女性の識字率	3 億 3425 万人	女子全体の 65.46%
男女中所得層・高所得層	4 億人	国民全体の 30%
女性の中所得層・高所得層	約 1 億 5000 万～2 億人	
中所得層・高所得層の 20 代女性	約 6000 万人	

(2011 年度のインド国勢調査より筆者が計算)

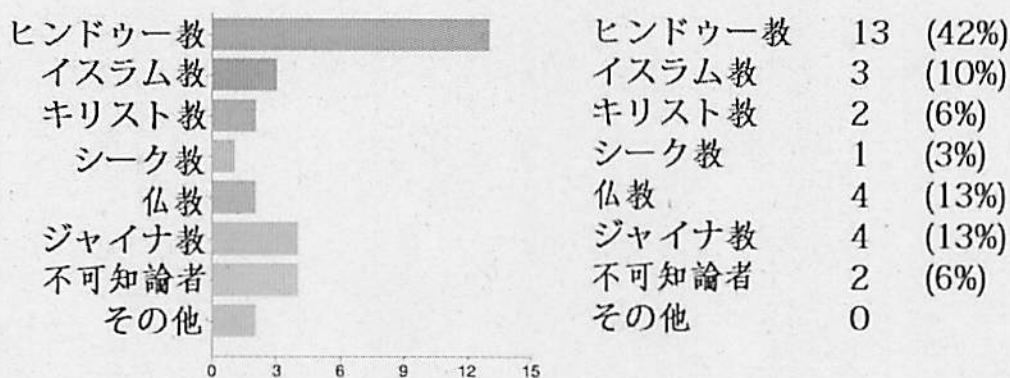


図1 アンケート回答者の信仰宗教

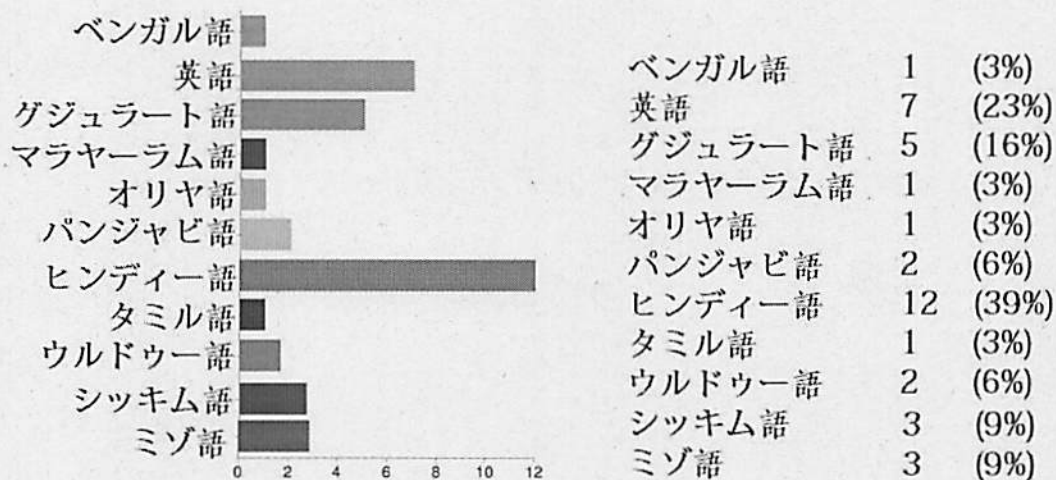


図2 アンケート回答者の母国語⁸

(図1、図2ともに筆者のアンケートのデータに基づき作成)

本論の第2章においてはまずダイエットの概要及び歴史を取り扱う。第3章では、インドの歴史的背景を述べ、筆者が行った匿名質問紙法とインタビュー調査をもとに、ダイエットという行為と社会の変化の関係を分析する。アンケート結果からダイエット経験の有無と要因を測定し、その行為と社会への自己反映の關係に着目し、どのくらいのインド人女性が身体の変化によって社会への帰属意識を表しているのか解析する。全体の集計をとるだけでなく対象者の多様な背景を考慮して、対象者の質問に対する一連の相互關係を事例として取り上げる。第4章でインド人女性の身体は従属するのは一個人なのか社会なのか考察し結論とする。

⁸ 生まれ育った背景により母国語を2つ以上話す者もいる結果、回答数は31名を超えている。

第2章 ダイエットの概念と歴史

本章では、現代におけるダイエットの一般的起源を探るために、その歴史的展開と文化的広がりを明らかにする。言語学的視点や社会学的視点と医学的視点からダイエットの背景をとらえ、ダイエットをめぐる問題を検証していく。第1節では、ダイエットという言葉が形成された過程と医学の領域における概念について確認し、ダイエットが生まれた背景を把握する。第2節では、ダイエットの社会的、文化的広がりを説明するためにダイエットのダイアグラムを説明し、その概略を検討する。第3節では、近代化が引き起こす新たな問題として摂取障害と近代家族に焦点をあててダイエットを論じている先行研究について概略を紹介し、第3章に取り上げる今回の調査対象であるインド人女性のダイエットの現状と課題に繋げていく。

1. ダイエットの概念と位置づけ

ダイエットは英語の“diet”に由来する。ダイエットの語源は古代ギリシャ語の“dieta”の「生活様式」という意味に始まり、フランス語で、1300年頃から「日常の食べ物」という意味として使われ始めた。

ダイエットの「ダイ」は英語の「日」を表す“day”と関連しており、ある決まった日に開かれる事柄や会議を意味している。その後、1900年代から英語では肥満や代謝異常に対する「食事療法」や「治療法」といった意味を指すようになった。同じダイエットと言う言葉でも英語と日本語では表記の仕方と意味合いが違い、英語の“diet”は日常の食事、食事療法という意味合いが強く、減量のための食事や運動のことを“diet”に“ing”をつけて“dieting”⁹と呼ぶ¹⁰。日本ではダイエットが「減量」や「痩身」などの体重を減らすための行為という意味で定着し、いつしか「食事療法」といった意味では使われなくなった。

現在、使われているダイエットの言葉の意味は主に3つある。1つ目は、日常の飲食物と常食である。2つ目は会議と議会という意味である。これは、ダイエットの言

⁹ The Oxford English dictionary, 2nd ed., 2nd ed. / prepared by J.A. Simpson and E.S.C. Weiner Oxford : Clarendon Press, New York : Oxford University Press, 1989
[Oxford Dictionary 1989 : 256]

¹⁰ 今回、この論文を作成するにあたって行ったアンケートは“diet”と“dieting”を使い分けて使用している。

葉の発祥地である古代ギリシャでは1日に決まったことをする意味のダイエットに政治的な会議という意味合いを付け加えた事から今に受け継がれている。3つ目は、体重を減らすために決められた食事や食事療法の意味を表している。以上の3つの意味からダイエットは、1日に必要な決まった定量の食事を指している。人間が活動するために必要なエネルギーは個人によって違うが、それぞれ必要な定量というのがあるという考えから、このダイエットの語源はきている[海野 1998: 7]。

人々は豊かになるにつれ、各自で自由に好きな量を食べられるようになり、定量以上に食べる者が出てきた。「かつて人間は身体を求める必要量の食事ですりていたのだが、食べすぎるようになった。その飽食の罰として、制限された食事としてダイエットが課せられるようになった」[海野 1998: 12]。修道院、軍隊や監獄では定量の食事が与えられるようになった。定量な食事が限られた場所での特別なものとなり、食事制限には懲罰的な意味が課せれることもあった。キリスト教やイスラム教にある断食にもこういった罰や肉体の浄化などの修行的な意味が反映している。このようにダイエットには罪と罰といった意味合いが含まれるようになり、現在のダイエットの概念にも引き継がれている。

ダイエットは、日常の飲食物、痩せるための方法、決められた食事という意味であるが、生理的、身体的側面だけでなく、社会的、精神的、風俗的な意味も含む[海野 1998: 30]。ただ痩せるための行為ではなく、なんのために、どんな方法でダイエットをするかによって、ダイエットの位置づけは変わってくる。世紀末美術の評論家である海野弘は、ダイエットの周辺と文化的広がりといった諸領域を示すダイヤグラムを著書『ダイエットの歴史』[海野 1997]の中で示している。ダイエットは方法としての「食」と「運動」があり、目的としての「美」と「健康」の4つに分けることができる。これを両極として縦軸とつなぐと、上が運動の極で、下が食の極とすると図1のダイヤグラムができる。ここでの「食」は身体の内面からのダイエット、「運動」は外面からのダイエットを示している。健康に属する右半分は、自然としての身体を扱い、美に属する左半分は文化としての時代によって変化する身体を扱っている。

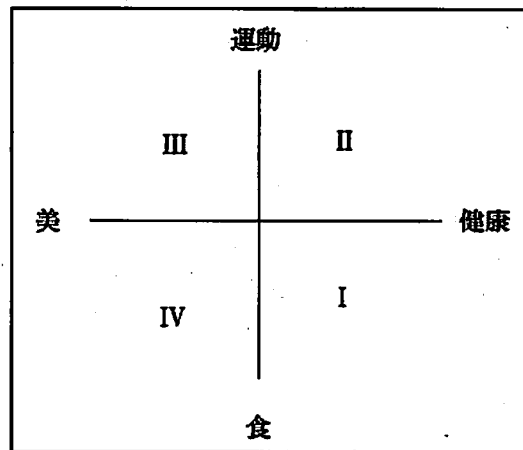


図3：ダイエットの周辺

([ダイエットの歴史 1998：29]より抜粋。)

1) 食 □ 身体の内側	2) 健康 □ 生理的身体性
3) 運動 □ 身体の外側	4) 美 □ 社会性、文化性

表4：象限の説明

右下から逆回りに表示

([ダイエットの歴史 1998：29]を参考に筆者作成。)

<第1象限>

食と健康の第1象限に入ってくるのが栄養学である。食物がいかに消化吸収され身体をつくり、エネルギーになるか、または身体と環境の間でどのようなエネルギー循環が行われているかが問題となり、環境問題、自然、地球といったエコロジーの輪にも広がっている。健康な種をつくる、優生学、遺伝子操作などにも接している[海野 1997：29]。

<第2象限>

健康と運動の間の第2象限には、体操やスポーツなどが属し、第一象限とも重なるが身体のメカニズム、生理学などが含まれる。生理学は、ホルモンや内分泌の生理や、動物¹¹の神経や脳の機能に関する、生命現象を追求する分野である[海野 1997：29]。この第2象限の中では、美しく痩せるまたは食事制限を目的としたダイエットとは違

¹¹ 生理学には動物生理学と植物生理学の2分野がある。現在では、動物のなかでも主に哺乳類の研究分野を生理学と呼ぶことが多い。

い、運動から健康的な体重を導き出す方法の分野である。

<第3象限>

運動と美の間の第3象限には、ダンスとファッションが属している。運動は外面から見えるものを示し、美は、私的、個人的な世界に対する社会、文化を表している。身体の動き（ダンス）と形（ファッション）がいかに美しく見えるかがここで重視される[海野 1997: 29]。競技でいうと新体操やフィギアスケート、シンクロナイズドスイミングなどが挙げられる。

<第4象限>

美と食の間の第4象限は、エステ、ヨガやアーユルヴェーダなどが所属している。このエリアはもっとも社会の変化を反映しやすい場所で、このダイアグラムの制作者の海野は「ニューエイジ」とも呼んでいる。エステやヨガとアーユルヴェーダは強い精神性（スピリチュアリティ）や宗教的なものが絡んでくるため、美を追求するために身体の内面的なところからダイエットを行うということから第4象限に属する[海野 1997: 29]。精神的な満足度が絡んでくる場合が多く、精神性（スピリチュアリティ）や宗教的なものが絡んでくる分野においてのダイエットの効果は医学的なものではなく精神的なものが多い。

以上の海野のダイアグラムからは、ダイエットは栄養学、生理学、遺伝子学、脳医学、スポーツ、ダンス、ファッション、スピリチュアリティ、道徳や整形といった領域に密接に関係していることが伺える。ダイエットをする際にどこに重点をおいても、四方から様々な分野が交差しあっているため様々な規範が同時に働く立場におかれている。どれか1つに偏ったダイエットをしても、他方では問題が生じてしまう。例えば、本章の後半に触れる拒食症や過食症などの摂食障害の人の場合、彼ら特有の美の価値観や身体性を持っており、それに従ってダイエットを施行しているため彼らのダイエット方法は第4象限に所属している。彼らの食生活は不規則になりがちで、健康と食の第2象限の面が欠けてしまう。逆に、健康と食のだけの象限を重視しても、運動や美容の側面を十分に行えない。ダイエットはバランスよく行わないと、どこかしら支障をおこしてしまうことがこのダイアグラムから分かる。次節では、女性がダイエットを施行するようになった歴史的背景を提示し、ダイエットが引き起こす摂食障害と社会の関係を詳しく述べていくこととする。

3. 女性とダイエット

ここでは、西洋の女性¹²に注目しダイエットの歴史を4期に分けて、ダイエットと女性の関係を明らかにし、現在使われているダイエットの意味は特に女性に関連していて、ダイエットの現象は近代化、都市化を表している事を明らかにする。

まず第1期の19世紀以前のダイエットと女性の関係を明らかにする。19世紀以前は、ダイエットがほとんど一般的な問題にはならなかった。それは、かつて女性はふっくらした女性が美しいとされていたからである。現代では、スリムな女性が好まれる時代になったが、その背景には女性の生物学的な体型の変化がある。19世紀になってから、女性の身体は大きくなり、太ってきたので問題になったのだ。男性と女性が平等に食事をとれるようになり、男性に体格が近づいた。14世紀から18世紀の間、ヨーロッパの経済が悪化し、女性の栄養状態があまりよくなかったため、女性は小さくなった¹³[桃木 2008: 2]。以前は、肥満よりも飢餓の心配のほうが大きかった弱者である女性の食事の分け前は少なかった。1970年代頃から産業革命の繁栄や近代化により女性の背が高くなり、体格がよくなり始めた¹⁴[国立健康・栄養研究所 2011]。

第2期である19世紀には医療の発達により女性がカルシウム不足からくる、くる病にかからなくなり、丈夫な骨盤をもてるようになった。くる病から解放され、まっすぐな背骨と健康な骨盤を持つようになる。20世紀初頭から医療の発達で、第二次世界大戦前まで、くる病が激減し、健康なシルエットを持つ女性が現れる。

第3期の20世紀にはいり女性、中世ヨーロッパでは、体格がよくなっていった女性をお尻と腰のメリハリをつけることで女性らしさを強調して魅力的みせる器具であるコルセットが流行していたが、20世紀に入ると徐々にコルセットを外すようになった。中世では大食いは罪とされたが、それは過度の快楽を罰するもので肥満や太った体型を責めるものではなかった。逆に太っているほうが健康的でよいとされていた。19世紀から女性がよく食べるようになり、栄養がよくなり体格がよくなってダイエットの問題が生まれ始めた。

¹² ここでいう西洋の女性とは、ヨーロッパ諸国とイギリス。本章の後半から、ダイエットの発端となったアメリカに注目する。

¹³ 14世紀から19世紀後半にかけての寒冷な気候（小氷期）の中で起きた現象。16世紀後半に始まる気温の低下が「17世紀の危機」を後押しした例など、当時のヨーロッパは農業生産の減少、伝染病の流行、人口の減少などで栄養状態の悪化している。

¹⁴ ヨーロッパの平均体重も身長も現在（2011年）が最大の値を出している。[国立健康・栄養研究所 2011]

第4期では20世紀が入りダイエットが女性にとって社会的地位の向上とフェミニズムに関連しているとみなされるようになった。19世紀から女性は、社会に出て活動しようとした。女性が社会的に見える存在となり、ダイエットは男性社会で男に見られるため、気に入ってもらえるための活動となった。その反面、ダイエットは女性が自立して社会に出ていくためともとらえられ、その表現のひとつでもあった。

主に、ダイエット・ブームの始まりはアメリカにおいてである。なぜアメリカなのかというと、世紀末になりアメリカの食生活が大きく変わり、太りやすい身体になった。ダイエットは近代化、都市化に関連した問題であり、世界的にもより大きな経済成長をしたアメリカでダイエットはより尖鋭的な現象として盛んになった。太る食生活に返還した近代アメリカではダイエットが関心ごとになった。この頃から、ダイエットの意味が「日常の食事」から「痩せる方法」という意味に移り変わっていった。ダイエットが問題になったことから、ファッション、新しい食生活やダイエット方法と器具、肥満の3分野に対する関心が高まった。「1980年から1910年の間、アメリカの中流階級は、今もつづいている、肥満体を敵とする戦争を始めた。ダイエット、または、ダイエットしないことの罪悪感といった。それまでなかった、大衆の組織的な関心が、デブとされる人に向けられた。おどろくほど強烈な反感と共に私生活のますます増大する要素となった。体型が女性のみならず、10年ごとにおどろくほど変わっていった19世紀のパターンと反対に、スリムを求める情熱は、少なくとも1世紀はつづくことになる枠組みをつくり出した。スリムの理想は、20世紀において、何度かはやわらげられた。胸やヒップはある程度変化した。けれども、全体としてはつづき、強化された。1900前後に形成された肥満に対する十字軍は、後の20世紀の基準によって馴化されたが、基本的な分かれとして確立された」(スターンズ¹⁵:1997)

ダイエットが一般的に知られるようになったのは、女性の憧れである女優や歌手、また彼女らが出ているテレビや雑誌の影響が強い。特にその女優が有名であればあるほど、彼女に憧れを持っている女性は彼女がどんな物を食べて、どんな服を着て、どんな化粧品を使い、どんな運動をしているのか知りたくなるのは必然的である。スターンズの『肥満の歴史』の著書で、20世紀においては肥満に対する批判は何度もやわらげられたと述べている通り、実際に近年自分の生まれ持った身体を誇りに思おうという動きは様々なメディアと通して行われている。アメリカの女性雑誌“Seventeen”で

¹⁵ ピーター・N・スターンズ『肥満の歴史—近代西洋の身体と美』1997。

は、痩せている女性モデルだけでなく、豊満な女性モデルも起用し、それぞれの体型に合うファッションが紹介されている。筆者はこの雑誌をインドで通っていたイギリス系寄宿舎の図書館で発見した。男子生徒は「気持ちが悪い。こんな人はモデルになるべきではない。」とののしっていた一方で、女子生徒は喜んで皆で雑誌を囲み熱心に読んでいたのを覚えている。2008年にアメリカの女性雑誌“Glamour¹⁶”が、若い女性に自らの身体に自信を持って欲しいと主旨で、豊満な女性モデルを7人起用し、彼女らのヌード写真と「私たちは美しい」と書かれたタイトルの記事を投稿した。この雑誌の記事は全米でセンセーショナルな反論¹⁷を呼んだ。女性モデルがヌードだけだっただけでなく、モデルの全員がアメリカで「肥満体型」の領域に入る女性だったからである。雑誌だけでなく音楽の中でも、女性は痩せていようが太っていようが自分の体に誇りを持つべきだと表現されている物も多い。2011年の全米ナンバー1ヒット曲であるレディー・ガガの“Born this way”にもそのメッセージが含まれている。この彼女の中に、「私には私なりの美しさがある。私はこうなる運命に生まれてきた(I'm beautiful in my way, I was born this way¹⁸.)」[Lady Gaga, Japan 2011]という歌詞がある。この歌のヒットの裏には、女性が感じている劣等感や罪悪感をやわらげるような歌詞に共感した人々がいるのだ。それでも、やはりこのような音楽が流行するのも、肥満はよくないという考えが心底にあるからである。しかし、どんな体型であろうと自分は自分であるという考えは、特に情緒不安定な思春期の女性にはあまり浸透しないのも現実である。

4. 現代社会におけるダイエットをめぐる問題

本節では、近代の病気である摂食障害に注目し、近代化によって新たに生まれた女性の問題を明らかにしていく。世界的にみても過食症と拒食症などの摂食障害が若い世代の人を中心に広まっている。第二次世界大戦直後までは、食料不足から、食べたくても食べられない状況にあった歴史があったため、食料があるのにも関わらず、自

¹⁶ Glamour, “Supermodels Who aren’t Super thin: Meet the Women Who proudly Bared it All”

<http://www.glamour.com/health-fitness/2009/10/supermodels-who-arent-superthin#slide=1>

¹⁷ お腹に肉がついているモデルを見て読者がショックを受けたと書かれた記事。

Glamour Shocks Readers By Featuring Plus-Size Model’s Belly.

<http://jezebel.com/5341749/glamour-shocks-readers-by-featuring-plus-size-models-belly>

¹⁸ Lady Gaga, Japan “Born this way” 和訳

<http://www.ladygagajapan.com/2011/01/28/lady-gaga-japan-3373>

らの意思で食料を断つという行動は医学的にも病として存在しなかった。その後、人々は一定以上の食料を口にすることが出来るようになり、肥満が問題になり、太っているということが健康に悪いという概念が定着し、

摂食障害の医学用語はアノレキシア・ネルヴァーザ (Anorexia Nervosa)で神経性無食欲症と訳されることが多いが、患者には思春期のやせ症と限定されて称されるのは発症年齢が深く関係している。厚生省神経性無食欲研究班が作成した拒食症の判断基準 10 項目には摂食障害の発症年齢は、30 歳以下で 10 歳以上という研究が報告されている。

拒食症と過食症などの摂食障害を理解するためには、これらの症状が現代社会においてはじめて問題として注目されるようになったという視点が欠かせない。ダイエットの経験者たちは自らが置かれた状況をどのように受け止め、どのように感じ、どのようにして拒食や過食の症状へと導かれたのだろうか。

1980 年代から、突如としてアノレキシア・ネルヴァーザ (拒食症) が現代の病として問題になった。拒食症が世界的に知られるようになったのは、アメリカの歌手グループのカーペンターズのカレン・カーペンターの拒食症による死であった。拒食症は、消化器官の問題ではなく、精神の病であることは医学的に明らかになっている。第 2 章の冒頭に示したダイアグラムの中でも、どこに従属するのか判断が難しいダイエットの動機と影響である。精神の領域である第 4 象限に属するのではないだろうか。食べないことで体重を減らすという目的のために行われる拒食に、美的にも周囲が共感することが出来ない人は多い。ただ、拒食を行う本人は、美を追求するための食生活というダイエット方法よりも、拒食自体が目的であり、宗教的断食やハンガーストライキのように、それを通して何かを示したり求めたりする手段ではないからだ。拒食症は、生物学的な病ではなく、精神的に追い詰められた文明病、現代病なのである。近代の動きである拒食を目的としたダイエットは、現代社会の人間関係のストレスを反映している。『食べすぎてしまう女たちー「愛」の依存症』の著者で自身も拒食症であったアメリカ人のジェニー・ロス、自分の拒食の行動に対してこう述べている。

「私がダイエットを始めたのは 11 歳のときでした。それから 17 年間というもの、私は毎日毎日、食べたいのに食べてはいけないものや、食べたくないのに食べなければいけないもののことを考えて、1 日の大半を過ごしていました。食べ物と自分だけ

の世界に閉じこもるようになってから、他人の影響をほとんど受け付けなくなりました。28 歳になったころに、頭の中は痩せることだけといった状態でした。(中略) 食べるもの、洋服のサイズ、ふくらはぎの脂肪細胞の数や、痩せられたらどんな人生が待っているかなどに気を取られている限り、他人に深く傷つけられずにすみしました。友人や恋人と私のあいだになにか起ころうと、体重と私のあいだのことのほうがはるかにドラマチックで身に迫るものだったからです。もし誰かに拒絶されたと感じた時も、拒絶されているのは私自身でなく、私の体なのだから、痩せていれば大丈夫なんだと自分に言い聞かせていました。」[斎藤 1996 : 8]

拒食症の人にとっては、「痩せたらこんなことが待っている」という希望を持っていても、痩せることに終わりはない。ジェニー・ロスが述べているように、拒食症の人が求めているのは痩せているという状態ではなく、痩せるという過程である。たばこやお酒に依存するように依存的なものであるからだ。イギリスの社会学者アンソニー・ギデンスは、女性のやせ症と女性における現代社会との闘いにおいて、「特に若い女性に起こるやせ症は、『自分らしく生きること』を良しとする社会的状況が激しく変動している社会の中で、若い女性が自分らしく主体的に生きることの困難さとそれでもそのような生き方を求めて闘う厳しさを示すものである」と述べている。拒食症の人にとってダイエットに効果がないのは、食べ物や体重が単なる症状であり、真の原因ではないからだ。空腹でなくても食べ物を食べるのには理由がある一方で、肥満は悪い、体重が重いのはよくないという価値評価が文化によって定着しているため、なぜ食べるのか、なぜダイエットするのかという理由を深く考えることがなくなってしまった。ダイエット志向は、人間の本能的なライフスタイルではなく、歴史的につくられたものだ。世の中に物や食べ物の種類が増え、必要な分以上食べ物を食べられるようになった今、身体と身体の自己満足度が対立するような現象が生まれ始めたのだ。また、女性は、女性に生まれた事によってつねに人生のタイムリミットを身体で感じている。毎月、月経で排卵をして子孫を残す準備を行っている。その行為は人によっては身動きが出来ないくらい苦痛であることもある。また歳をとればとるほど、妊娠の確率は低くなり、40 代、50 代になると閉経を迎える。また、家族や社会から結婚や妊娠へのタイムリミットを指摘され、なんとか期待に答えなければいけないというプレッシャーやストレスを感じてしまい摂食障害にいたってしまう女性もいる。こうい

った過食症や拒食症を経験した女性の言葉に耳を傾けると、女性たちの「生きる困難」や「苦しさ」はこの社会で女性のおかれた立場に作用している規範のありように密接に関わっているのだ。

第3章 歴史的背景から探るインド人女性

本章は、インド人女性のライフスタイルに対する考えや感覚が、どこまで社会や文化によって構成されたり、介入されたりしているのか考察する。インドの宗教の歴史の流れをインドの女性を中心に述べる。現在の女性がダイエツトを行うようになった経緯に関わるいくつかの問題の所在を述べ略述することとする。

1. はじめに

インド人女性の歴史的に形成された身体性を語る上での課題は、このインドの多様性と統一がどのように生まれて、また絡み合って現在のインド文化が形成されたのか探ることである。インドは南アジアのインド亜大陸の中心に位置し、面積が 328 万 7,283 km²の国である。人口は約 12 億 4,200 万人 (2011 年 11 月 1 日) で、その構成はインド・アーリア語族(約 72%)、ドラヴィダ語族 (25%)、そのシナ・チベット語族、オーストロ・アジア語族等の多様な民族からなっている。言語もヒンディー語を公用語、英語を準公用語とし、その他 17 言語が憲法で定められた地洋公用語とされている。宗教¹⁹もヒンディー語が一番多く (80.5%) ²⁰、続いてイスラム教徒 (13.4%)、キリスト教徒 (2.3%)、シク教徒 (1.9%)、その他に仏教徒、ジャイナ教徒、ゾロアスター教徒 (パーシー) 教徒、ユダヤ教徒、アニミズムとあり多様である。インドは 27 の州と 8 つの連邦直轄領で成り立っている。首都はデリーで、第 2 首都がムンバイである[インド国勢調査 2011]。

一言に「インド人女性」と言っても、1 人 1 人まったく異なる背景を持った人の集まりであるのは明らかだ。インド人女性が身につけているサリーの着付け方からして、地域や人々の習慣によって非常にさまざまな変化がある。彼女らは実に多様で複雑な構成社会に所属しており、またその自己を分類する領域の境界線はどこかをはっきりすることは難しい。この時間とともに変わりゆく環境の中で、インド人の保有する文

¹⁹ インド国勢調査 2011

http://censusindia.gov.in/Ad_Campaign/drop_in_articles/04-Distribution_by_Religion.pdf [インド国勢調査 2011]

²⁰ 世界の 8 人に 1 人がインド人という計算になる。

化がどこまで固有のもので、どこからが外来のものかの判断するのは歴史的背景の説明なしには不可能に近い。地理的条件だけでなく、民族、言語、宗教、慣習、社会組織の分野においても、インド文化の形成のされかたを特徴づけるものとして複雑に絡み合っている。民族の存在と深い繋がりをもつ母国語さえも人によっては数ヶ国語以上話す場合がある。しかし、複雑な絡みや総和の中には結びつきは存在し、それは一側面からだけでは見えにくい。そこで本章の目的として、2節でインド人女性がダイエットを施行する社会的理由をアンケートから明らかにし、3節ではこれらの社会的理由の背景を宗教の歴史から見出し、両者の視点から女性の身体性を明らかにしていく。

2. インド人女性はなぜダイエットをするのか

本節では、現在のインド人女性の人生に影響した事柄を明らかにした上で、インド人女性の間でダイエットが流行していった背景を述べ、インド人女性31名に行ったインド社会とダイエットに関するアンケートを中心にダイエットの意義の分析とその影響を考察する。

インド人女性がダイエットなどの人生において何か決断する時に、どういった判断基準や軸をもとに決めているのだろうか。これらを分析するために、アンケート協力者に人生に影響した要素を挙げてもらった。影響した要素は多かった順に「家族」が全体の87%で、次に学校や先生、文学、専門性など「教育」に関することが71%、文学、アニメ、映画などに関する「芸術」が71%、「宗教」は64%、「友達」が48%、生まれ育った街や「環境」が26%、スポーツが23%という結果だった。本論では、インド人女性にダイエットのブームの火をつけた出来事を提示し、以上に挙げた上位に入る要素の中から主に、「宗教」、「家族」、「芸術」に焦点をおいて論を広げていく。

以上に挙げた影響要素を対象化する前に、まずインド人女性にダイエットのブームの火をつけた事例を紹介する。かつては、豊満な身体的女性が魅力的とされていたインドであったが、その美意識が一転する出来事が起きた。1994年に、インド人女性で初めて2人がミス・ユニバースとミス・ワールドに同時に優勝した。ミス・ワールドの優勝者はアイシュワリア・ラーイという西洋的な美を連想させる色白で青い目をもったインド南部のカルナータカ州マンガロール出身の女優である。インド人代表として彼女の美貌が世界に認められたことで、インド人女性の美に対する価値観が一変

した。特に、映画産業が世界一であるインドでは映画俳優が国民に与える美意識の影響は非常に大きかった。インド第2都市であるボンベイには、ボリウッド²¹と呼ばれるアメリカのハリウッドのような映画の街があり、そこでは年間1,000本²²の映画やドラマが撮影される。インドの映画は台詞があまりなく、ほぼダンスだけで構成されているものが多い。言語もヒンディー語が使われている。インドにはこのようなインド独自の映画文化を持っており、教育を受けていない層の人でも楽しめる内容になっている。そのためハリウッド映画が上映されても、彼らは言葉も文化も理解できないため富裕層以外の人にはあまり好まれなかった。また、上映されても宗教的なタブーにより映画の中のキスシーンや露出の激しい女性のシーンなどはカットされてしまうため、カットされた前後のつじつまがあわないストーリーの映画になってしまっていた。しかし、近年この急激な経済成長とともにエンターテインメントとメディア業界はこれまで以上成長しており[The Film Street Journal 2010]、映画産業に変化が起きている。第一に、中間層の増加により、英語を理解できる人が増え、英語のインド映画が作製されるようになったことである。第二に、インド映画にダンスのシーンが減り、台詞が多くなったことである。また、比較的露出の少ないラブシーンもインド映画に起用されるようになった。第三に、英語の普及により、ハリウッド映画が映画館で上映されるようになった。ハリウッド映画の影響は、インド人が理想とする女性像を変えることになった。本論を執筆するにあたって行ったアンケートで、「あなたがもし違う女性の体型になれるとしたら誰になりたいですか」と質問に対して、約5名がボリウッド女優やインド人女性の名前を挙げたが、ハリウッド女優やアメリカの歌手の名前を挙げた人の数はボリウッド女優よりも3倍近く多く14名²³だった。彼女らが理想とする体型をもっている人のほとんどは海外の女優や歌手であった。

またインド国民の健康に対する意識にも変化も起きている。所得格差もある一方で、2010年にインドのムンバイで開かれた第5回アジア・オセアニア肥満学会議(Asian-Oceania Conference on Obesity)でインド人は世界一の肥満予備軍の国である事

²¹ ボンベイとハリウッドの言葉を足して2で割って命名された映画街である。

²² インド映画中央検定局(Central Board of Film Certification)

<http://cbfcindia.gov.in/>

²³ 回答者の挙げたアメリカの女優や歌手は以下の通り。ビヨンセ(アメリカの歌手)3名、スカーレット・ヨハンソン(アメリカの女優)3名、ジェニファー・アニストン(アメリカの女優)2名、マドンナ(アメリカの歌手)、オウドリー・ヘプバーン(アメリカの女優)1名。

が明らかになった。インドは急速な経済成長による生活習慣の変化から肥満や糖尿病が現在深刻な問題になっている。肥満学会は2年に1回行われる学会であるが、2010年は肥満の原因となる糖尿病患者数が世界一多いインドで開催された。2007年度の調査によると、インドの糖尿病患者は4,000万人であった。2011年の予想ではその2倍の数の人が糖尿病にかかっているとのことだ。貧富の差がありながらも、肥満や糖尿病がここまで増えた背景として、経済の急速な発展で増加した中間層の活発な消費によって生活習慣が変わったことがある。また、この経済成長と中間層の拡大とともに、女性の進学率が増え、カーストや社会の枠を超えて男性と同じフィールドで働く優秀な女性が増えてきたことも理由に挙げられる²⁴。インドのビジネスの場でもアメリカのダイエットの考えは普及してきている。アメリカでは極度の肥満の人は管理職にできないと言われている。自分で自分の健康状態を管理できない人にはリーダーを任せられないという発想である。アメリカで発祥したエクササイズで身体をつくっていくという基本理念は、「身体はコントロールできる」という考えに基づいているからだ[石田、石井 2005: 304]。2010年にインドのムンバイで開かれた第5回アジア・オセアニア肥満学会議(Asian-Oceania Conference on Obesity)の調査によると、調査対象国²⁵の中で肥満が昇進に影響するとの回答比率が最も高かったのはインドだった。[リーダーズ・ダイジェスト 2010]。

肥満が就職に左右するという理由から、ダイエットを施行するインド人女性が増えている。では実際にダイエット経験者はこうした理由でダイエットを始めたのだろうか。今回この論文を執筆するにあたって行ったアンケートでは、31名の回答者のうち、ダイエットの経験がある人は14名いた。彼らは最低1回以上のダイエット経験があり、そのうちダイエットが成功した人は3名だった。



図4 ダイエットを経験はあるか

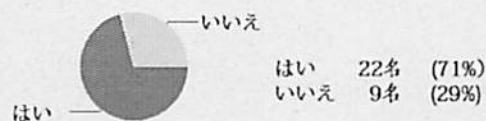


図5 自分の体型に満足をしているか

²⁴ 2011年に行われたインド国勢調査より2005年の女性の雇用比率のデータを参照。非農業従事者で高い役職につく女性は年々増加している。

²⁵ 対象国は、上記の調査と同様のフィリピン、アメリカ、英国、インド、オーストラリア、オランダ、カナダ、中国、ドイツ、ハンガリー、フィンランド、フランス、メキシコとロシアの16ヶ国である。

(筆者が行ったアンケート結果より筆者作成)

彼ら 14 名がダイエットを始めた理由は様々であるが、彼らに共通する理由に「友達が痩せている」(5 名)や「周りからのプレッシャー」(3 名)と「宗教的な理由」(3 名)という理由が目立った。その他に、「気になる異性に振り向いて欲しくて、美しくなりたかったから」(1 名)、「出産をして太ったから」(1 名)、「ある特定の食べ物に対するアレルギー反応が出たから」(1 名)という結果だった。また、彼らに宗教的理由で行う食事制限と、痩せるために行うダイエットにはそれぞれ違う認識を持っているかと聞くと、シッキム州出身の仏教の 21 歳の学生は「私たちが行う断食などの食事制限と、ダイエットとでは本質が違う。自分が辞めたいと思っても、宗教はその甘えを許してくれない。」と語ってくれた。また、ダイエットという概念に触れてから考え方が変わったと言う人もいた。ヒンディー教で 19 歳の学生は「今まで生まれてきてから、宗教的な理由で食事制限をすることを日常的にしてきたし、疑問にも思わなかった。しかし、自分が成長するとともに、色んな人に会って色んな価値観に触れて、食事制限を含むダイエットは美を目的としたものがあると気づいた。やっぱり自分も、太ったら痩せたいし、かわいい洋服を見たら似合う女性になりたいと思う。だから、宗教的な理由で食事制限をする時に苦痛になる時は、自分は綺麗になるためにやっているんだと思うようにしている。」と。彼女は、宗教的な理由で食事制限をする断食とダイエットの違いに触れ、近年ダイエットをするインド人女性は心境の変化を語ってくれた。

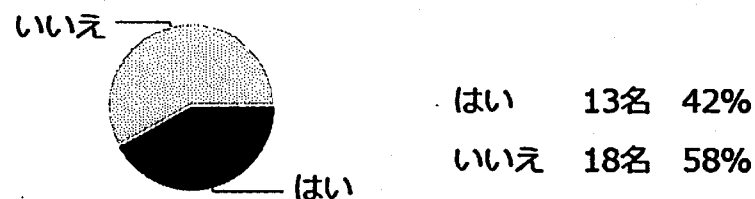


図 6 宗教的な理由でダイエットするか

(筆者が行ったアンケート結果より筆者作成)

(1) 食文化

本節では、身体性から切り離すことの出来ない食べ物の消費にまつわる習慣から、

周辺の社会文化的な環境を明らかにし、身体的な経験や身体感覚がどのように社会や文化によって構成されているのか探っていく。筆者が行ったアンケートや文献研究から現在のインド人女性は何を主食とし好んで食べているのか、また彼らの食生活がライフスタイルにおける意思決定でどういった影響を与えるのかを明らかにしていく。

人間は誕生したその瞬間から他の人々や文化が生み出した様々なものと触れ合い、食べるという行為から体内に文化を取り入れている。どんな社会にも食生活や食の好みをめぐる個人の身体性や主観性を形成するうえで与える影響のものは存在する。身体性や主観性を形成したり経験したりするうえで、食べ物をめぐる行動は重要である。食べ物は生物学的に必要なものだけでなく、社会階級や地域、国、文化、ジェンダー、ライフサイクルの段階、宗教、仕事の境界を分かち、儀式と伝統、祭典、季節、一日の時刻を区別することにも役立つ[デボラ 1999: 3]。

マハラシュトラ州出身のジャイナ教の20歳の学生とその母親である主婦48歳は、ダイエットに関わる事柄で宗教がライフスタイルに及ぼす影響があることをアンケート内で述べている。「ジャイナ教では、特に食生活に関して決まりが多くある。私たちは8月から9月の間に2種類の断食を行う。断食にも様々な種類のシステムがあり、1日だけの物だったり、3日のものだったり、その他にもっと長い期間の8日、15日間や、21日間と月1回とそれぞれ決まった日程に行っている。主に肉類

(non-vegetarian)、卵や地下に育つもの(ニンジン、ジャガイモ、タマネギ、ニンニクなど)は食べてはいけない。私(22歳/学生)はあまり宗教熱心ではないので、菜食主義で、肉は食べないという基本的なことしか行わないが、私の母は、日常的にジャイナ教の決まりを守っている。)」インドの菜食主義の理念は生命を破壊しないことにある[鶴田 1997: 281]。そのため未来の生命を宿す卵は含まれないが、動物を殺す事なく得られる乳はこの理念に含まれる。乳から作られるバターはインド料理には欠かせない。

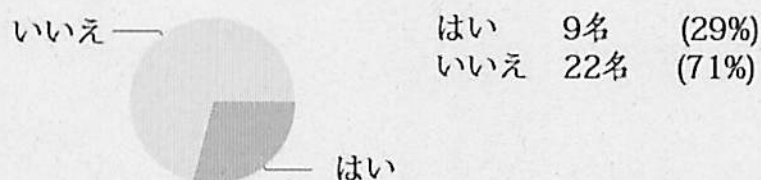


図7 菜食主義か

(筆者が行ったアンケート結果)

インド独立に貢献したマハトマ・ガンディは著書の『インドのベジタリアン²⁶』の中で、身体性と食の関係について記している。彼は『ザ・ベジタリアン』という論文を6回にわたって寄稿しており、その論文は掲載された『ベジタリアンメッセンジャー』の中で、彼の菜食主義への訴えはベジタリアンの利点を道徳的、健康的、そして経済的と説いた。また、菜食主義であれば飲酒や禁酒から離れる傾向にあり、ベジタリアニズムの原則が社会改革に間接的な影響を及ぼしているとも説いている[ガンディの言葉 2011]。

インドには、断食や菜食主義のような宗教が絡んだダイエット方法以外に、どの宗教の背景の人にも共通して従っているインドの医学がある。それはアーユルヴェーダと言って、古代インドにアーリア人が侵入される前から伝わる医学である。アンケート協力者にアーユルヴェーダの経験はあるかと聞くと半数以上があると答えた。

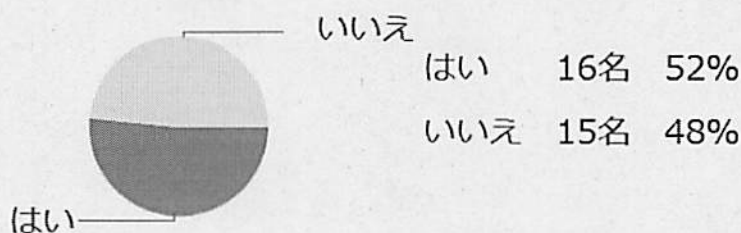


図8 アーユルヴェーダをしたことがあるか

(筆者が行ったアンケート結果より筆者作成)

インド古代の言語であるサンスクリット語で生命の科学と言う意味である。アーユルヴェーダは主に南インドとスリランカで試行されている。インドの古い言葉で身体とは食物で出来た体（アンナマヤ・コーシャ）という言い方をする。アーユルヴェーダの考え方では身体は楽器のように3本の弦がついていて、チューニングが必要である。その3本の弦は火（ピッタ）、風（ヴァータ）と水（カパ）の原理に置き換えられる。弦楽器と同じように弦は温度や湿度が変わったりするとすぐに緩んでしまう。食物には調和の力がある。に弦は温度や湿度が変わったりするとすぐに緩んでしまう。食物には調和の力があるという考えがある。筑波大学の生物資源の博士コースで学ぶ

²⁶ 2011 マハトマ・ガンディ、鳥居千代香 翻訳 『ガンディの言葉』、岩波書店。

ヒンディー教の28歳のヴェニータさんは、アーユルヴェーダの知恵は家庭内で日常的に使っていると教えてくれた。例えば、身体の調子が悪い時はスパイス（香辛料）やナッツを食べる。風邪を引いた時はショウガを摂取する。熱が出た時はターメリック²⁷をおでこに塗る。スパイスはどの家庭にもおいているくらいインド料理に必須の材料である。そもそもスパイスは材料以前に薬の作用を持っており、香りの強い物には調和の力があり、アロマのような癒しの力も備わっている。スパイスは、昔から食べ物を腐りにくくする機能としてつかわれていた。その効果による食物の持続性から、スパイスがアンチエンジングの効果があると思われ、インド人女性はスパイスから作られたオーガニック化粧品を好んで使っている。

(2) 運動

インド人女性はどのような方法でダイエットを行っているのだろうか。アンケートとインタビューの結果、主要なのはインドに昔から伝わるヨガ²⁸や宗教的な祈りのルーチンをすることが明らかになった。

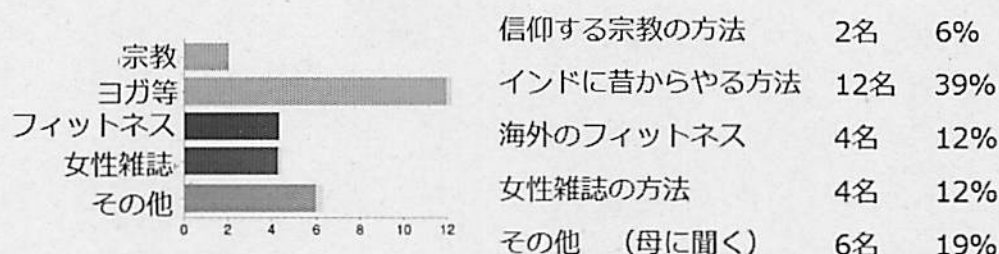


図9 ダイエット方法

(筆者が行ったアンケート結果より筆者作成)

ムンバイに住むヒンディー教21歳の学生は、ヨガとアーユルヴェーダがダイエットに与えた影響について話してくれた。「ヨガとアーユルヴェーダは、物的な外見の美しさを超える、健康的な身体を維持するためのダイエット方法を教えてくれた。私は肌

²⁷ ウコンの一種。カレーの黄色い色を与えるスパイス。水とまぜるとハッカのようにスースーする。

²⁸ ヨガとは呼吸法を操作して、生命元素たる「気（プラーナ）」を身体に漲らせる技術である。

のためにオーガニック化粧品を使用している。オーガニック化粧品をつかったり、野菜やスパイスを食べて身体を浄化したりする事によって、内からも外からも綺麗になれる。」また、信仰する宗教の方法を取るヒンディー教で23歳の社会人は、祈りをすることによって内面の美しさを追求できるだけでなく、日常的に行われる祈りはある意味心の運動にもなると述べている。「まず第一に、私は午前中と約5分間寝る前に毎日祈る。私は祈るたびに魂をものすごく使う。毎日祈る事によって、情緒を安定させる運動にもあるからだ。また食べる前に私達は私達に食糧を提供してくれる私達の神と感謝の意を表す。私は非肉食主義だが、我々は、一部の神への信仰のために、火曜日と木曜日に肉を食べてはいけないことになっている。私たちは牛肉を食べることができない。それは宗教の中で牛は私たちの母親と考えているからだ。私たちは断食も行う。一日中何も食べてはいけないと決まりだが、私たちは夜だけで食べることができる。私たちヒンディー教は常に弱い者を保護し、任意の食事制限によって私たちはその日食べなかった食料が貧しい人などに提供される用に祈る。だから私は信仰している宗教の方法に従ってダイエットを行っている。」イスラム教徒の21歳の女性も同様に祈る事によって運動をしていると語った。「私たちは"Namaaz(それはアッラーの名の祈りを暗唱することを意味する)"を祈るときに、"Salat"(サラ：祈りの体勢)をする。祈りをする儀式はイスラム教の5本柱の決まりである、第2の柱の儀式の決まりである。私たちは祈りを1日5回は実行する。モスクでやるのが好ましいが、遠い場所にいる時はメッカの方向に向かって行う。私たち祈りの際手を動かし、そして耳、胸、そして膝の上を床に配置する必要がある。私たちはひざまずいてお祈りをするため、長時間の間の膝に座って行う必要がある。時には膝が痛む時もあるが良い運動になる。」このようにインド人女性の行うダイエットは宗教的な意味合いや意義が反映されている。ときには近代のダイエットと宗教的に行う食事制限や祈りとの本質的な意義を困惑する時もある。自分の主体性と社会の求める慣習の狭間にいる女性たちはこういった立場におかれているのか次節で宗教の歴史から詳しく考察してく。

3. 宗教と女性

現代のインド人女性の立場を語る上で、宗教との関係を見逃すことができない。歴史上で様々な人種と宗教の人々の移動があったことはインドの多様性を生んだ主要な変遷である。本節ではこういった経緯で現在のインド文化が築かれていったのか宗教の来歴

を述べたうえで、人口の8割以上が信仰するヒンディー教に焦点をおき、インド社会の形成に多大な影響を与えるカースト制とインド人女性の関係を考察する。

(1) 宗教の歴史的背景

現在のインドにあたる土地は西暦紀元前 2500 年頃のインダス文明が起源になっている。インダス文明は、インド北西部のアフガニスタンとインド亜大陸の間を流れるインダス川周辺に暮らしていたドラヴィダ人を中心に作られたものである。インダス文明は文化があったことを物語るアクセサリーなどの様々な産物を残している。文字のようなものが掘られた印章や遺跡が残っているが現在も解説がなされておらず彼らの生活様式や文化は謎につつまれている[近藤 1977 pg25]。のちにアーリア人が残した祭典が最古に残る文献とされている。西暦紀元前 1500 年頃からカイバル峠を超えてアーリア人（インド・ヨーロッパ語系の牧畜民）がやってきた。アーリア人は雷や火などの自然を神として礼拝し、その賛歌集であるリグ・ヴェーダ²⁹を書いた。アーリア人は紀元前 1000 年までにはインドの北部まで広がった。彼らの思想はヒンディー教の基盤であり、彼らの職業的階層（ジャーティ）は初期のカースト制度の起源である。リグ・ヴェーダに基づいた思想は、長い年月をかけて宗教として形を変えていった。ヒンディー教の源流であるバラモン教はカースト制度を基盤とし司祭階級であるバラモンが紀元前 1500 年から西暦 400 年まで最上位で取り仕切っていた。紀元前 500 世紀から 400 年の間にカースト制度ができてくる[辛島 1992: 162]。紀元前 500 年頃にバラモン教の根本思想であるカースト制を否定した仏教が登場した。仏教はゴータム・シーッタルダ（ブッダ）が特権階級であるバラモン以外の民のために始めた宗教である。仏教は拡大するヒンディー教の圧力に追われインドでは徐々に衰退していったが、現在でもアジアを中心に世界へ広がり世界 3 大宗教とまで呼ばれるようになった。仏教はカースト制度でも特に人口の多い低い階級にある者を味方し、仏教信者はインド各国で拡大していった。ヒンディー教は、仏教から圧力をかけられていたバラモン教が、バラモンのカースト制と多神教等の思想を受け継ぎ民族宗教や民間信仰を融合させて紀元前 400 年頃に成立させたものである。仏教と同じくして、バラモン教への疑問からカーシャ・ヴァルダマーナによって紀元前 500 年に生み出されたジャイ

²⁹インド史を読むと必ずといっていいほど、リグ・ヴェーダの記述にもとづいてインド文明の誕生が述べられている。インド史は神話から歴史記述が始まっている極めてまれな地域である。リグ・ヴェーダが現在のインドに残っている最古の文献。

ナ教がある。ジャイナ教は不殺生（アヒンサー）の思想をもとにした厳しい苦行・禁欲主義で知られている。ジャイナ教信者は地球上に生きる生き物全てを大切にし、道を歩いていて誤って虫を飲み込んだり、足で潰さないようにしたりするため、口にマスクをつけてホウキで足下を掃きながら移動をする。ジャイナ教は国外へは広まず信者はインド人がほとんどである。

その後、インドではマウリア王朝になり仏教がより盛んになった。100年、200年になるとクシャーナ王朝になり、外来民族が多くインドにはいつてくるようになった。東方諸教会の1つであるキリスト教のシリア正教が100年頃インドに入ってきた。シリア正教はキリスト教の一教派で、古代キリスト教の姿を色濃く受け継いでいる。後に伝わるカトリック教とは異なる宗派である。インドへは100年頃にカイロでシリアから伝わったと考えられている。ケララ州が信仰の拠点で、ケララには今でもシリア語による典礼が残っている。その後、ユダヤ人の民族宗教であるユダヤ教の思想は700年以降インドに持ち込まれた。主にアラブやヨーロッパを行き来する商人の移住によってインドへもたらされたといわれている。現在、ユダヤ人はインド南部のケララ州に多く存在する。キリスト教のカトリック自体は1世紀頃からすこしずつインドへ上陸したとされるが、本格的にカトリックが伝わったのはヨーロッパ諸国が大航海時代に入りインドへ進出しはじめてからである。特にポルトガルが拠点としていたインドの都市のゴアや、イギリス統治の中心となった街のカルカッタはヨーロッパ建築による聖堂や修道院が多い。

700年頃にゾロアスター教（拝火教）がペルシャ（現在のイラン）から入ってきた。拝火教の名の通り、火を礼拝する宗教で、善と悪の2元論が特徴である。インドへはイスラム勢力によりペルシャを追われた信者たちがインド北部に移住したことで伝わった。世界最古の宗教として知られており、そのコミュニティの団結は非常に強い。インドではゾロアスターよりもパーシーという名称の方がよく使われる。ムンバイには今もインドにゾロアスター教を持ち込んだ開祖ザラシュトラが点火したとされる炎が燃え続けている。

1200年頃にムハマドを開祖とするイスラム教徒の勢力がインドに攻め込み、インドで最初のイスラム王朝であるゴール朝を築いた。その後、イスラム教は、1526年にインドの建築タージ・マハルを築いたことで有名なムガル帝国が始まる。ムガル帝国は1600年前半から1700年初頭が最長期であった。1858年にイギリス直接統治の開始に

より滅ぶまで 200 年もの間インド国内で検局を握っていた。イスラムの思想は比較的流動性の高い社会でヒンディー教のカースト制のような身分の固定という考え方になじみがない。1920 年代から不可触民・カースト制撤廃運動を始まり³⁰、それ以来インドの抑圧された人々はイスラム教に改宗するものも多かった[辛島 1992: 88]。インドがイギリスから独立後、イスラム教の勢力が再度拡大し、その後の 1973 年のパキスタン分離独立、対立など現在にも影響を与えている。現在は都市部に多くの信者を抱え、ヒンドゥー教のカースト下層の人々の受け皿となっている。

1500 年に発祥したシーク教は教祖ナーナクによって成立された、イスラム教のインド流入後、ヒンディー教にその長所を融合して生まれた宗教である。ヒンディー教の輪廻転生を受け入れているが、カーストは完全否定している。総本山はアムリトサル黄金寺院（ハリマندیル）である。シーク教徒の男性はターバンを巻いているのが特徴である。多くの人がインド人を連想する際にターバンを巻いている男性を思い浮かべるが、実は歴史的にみると他の宗教に比べて比較的新しい宗教である。

インドはイギリスの植民地におかれ、イギリスはヒンディー教、ジャイナ教、イスラム教、ゾロアスター教、シーク教そして仏教がそれぞれ対立はありながらも同じ国に共存していたが、イギリスは 1913 年にインドでのキリスト教の布教を許した。宣教師はヒンディー教を邪悪な宗教だと説教した[鶴田 1971: 278]。改宗を唱えたがヒンディー教徒は、イギリス人がヒンディー教の神聖視する牛の「牛食い」を非難した歴史がある。独立後のインドでのイギリスの影響はヴィクトリア朝のゴシック様式の鉄道駅から刑法、教育制度に至るまで様々なところに見いだす事が出来る。現在もインド人はイギリスから持ち込まれた競技クリケットに熱中し、インド全土で国民をつなぐ言葉(link language)として英語が使われている。

長い歴史の間に様々な宗教が持ち込まれたインドであるが、なぜこんなにもインドにはヒンディー教が増え、カースト制度が今もなお続いているのだろうか。まず、カースト制の固定化はインドにイスラム教が入ってきたことを契機として強化されたと考えられている。仏教もヒンディー教の身分固定化に反対したが、やがてバラモン教とヒンディー教の圧力と拡大によりインドからは消滅した。また、未だにカーストの差別意識がなくなる理由としてカースト制がヒンディー教の宗教観と結びついて

³⁰ 現在のインドにおける不可触民運動を基礎づけたアンベードカル (1891-1956) は不可触民出身だった。彼はアメリカのコロンビア大学で博士号をとったが、インドでの差別に苦しんでいた。

いるからだ。ヒンディー教は現在でも身分は前世の行いからの報いであるという輪廻転生（カルマ）の思想から、自らのカーストを受け入れざるを得ないからである。

(2) ヒンディー教とカースト制度

本節では、カースト制度と女性の関係を明らかにして、現在のカースト制度が女性の人生の選択に影響していることを指摘する。主に結婚を例に女性の置かれている立場を説明していく。

インドには基本的なカーストとして4階級あり、僧侶階級（バラモン）、武士階級（クリシュナ）、商人階級（ヴァイシャ）、奴隷階級（シュードラ）³¹がある。またいずれかのカーストに所属しない物は不可触民とされた。カースト制³²はインドの言葉ではなく、ポルトガル語の種族、血族と意味するカーストに由来している。15世紀末に南インドに来航したポルトガル人がインド人社会の階級性をその集団ごとの社会を名付けた。

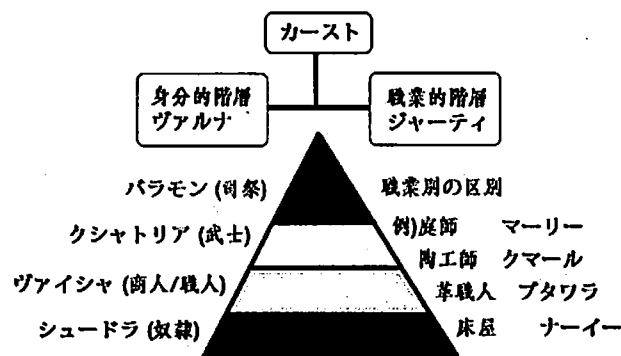


図 10 カースト制度

< 2011 『美しいインドに呼ばれて』を参考に筆者作成 >

カーストの中には、庭師（マーラー）、陶工師（クマール）、革職人（プタワラ）、床屋（ナーイー）のようにジャーティという職種別集団に分かれている。以上に挙げた、職種は現在もインド人の名前として使われている。そのため職種と名前を聞くだけで、どのカーストか分かたりする場合がある。ジャーティは親戚関係でなくても職種別のネットワークで成り立っている集団である。血縁がなくても、絹織物組合に属する

³¹ジャーティのカーストの身分は地方によって疎らがある。

³²原語にもとづきヴァルナ制と呼ばれることもある

人たちが経済的な情報ばかりではなく、衣食住に関わるすべての情報を共有するという役割を持っている。職業と名前は代々受け継がれていて、大きな大家族のような位置づけにあるのだ。

カースト制度が出来た成り立ちは、様々な説³³があるが主要なのは職業的階層が身分的階層に変化したというものだ。ヒンディー教を信仰する人口が8億人もいるインドでは、いまだに宗教観から起こる問題を抱えている。インド人女性を束縛する例としてまず結婚の在り方があげられる³⁴。結婚の際、女性側に持参金（ダウリー）が発生する。持参金が少ないと結婚後も夫や姑から暴力やいじめを受ける例も多発している[ナーラーヤン 2011]。女性の家族は結婚の持参金として年収の数年分にもあたる高額の自動車を要求されることもある[NHK 海外ネットワーク 2011]。もう1つヒンディー教の宗教観から起こる問題の代表的な例として、サティーがあげられる。サティーとは、貞淑な女性という意味であるが、言葉自体は寡婦焚死のことを指す。夫の死に殉じて火の中に身投げする行為である。ヒンディー教の先駆けとなるバラモンの社会では、男尊女卑の傾向が強く夫人は結婚して家庭の妻となると家事を賄い、夫を助けて家庭の祭事を行い、最初たる男子を設けることを目的とし、夫に対しては絶対的服従と貞節と旨とし、大家族の中にあって多数の長上につたえ常に忍従の生活を送らねばならなかった。貞節は婦人の最大の美德として称揚せられたが、この思想はさら

³³ 1説には遊牧民のアーリア人がインドに侵入したときに肌の色の違いに気付き、それを身分制に結び付けたのだというものもある。インド・アーリア系の肌の白い人々は、もともと神官、戦士、商人の3階層からなる社会を持っていたが、征服したインドにいた原住民は肌が色黒で、彼らを奴隷階層として支配したと考えられている。[マーヴィン 2001: 35] ヴァルナとはアーリア人の言葉で「色、外観」のことで、皮膚の色で征服民族のアーリア人と被征服民族の非アーリア人を区別したのが始まりとされる。しかし、リグ・ヴェーダの記述からすれば、階級の存在は人間の祖先であり、インドそのものから生まれたとされている。遊牧民にはもともと神官、戦士、農民という3階級を持っていたが、征服された後に奴隷層（シュードラ）が後からつけくわえられたという記述はない[田中 2006: 16]。以上のように神話にもとづいた社会構成は、歴史的にみても様々な不都合は事実とぶつかりあう。

³⁴ 2011年の10月31日に世界の人口が70億人を突破したことを国連が発表した。国別に見るとインドの総人口は中国の13億4,800万人に続き2位の12億4,200万人という統計が出ている。インドの人口は2050年には16億9,200万人になると予想されている。インドは24歳以下の若い世代が6億人と人口の半分を占めている。世界全体での性比は医学的³⁴にみても女性の方が男性より多いと証明されている。ところが、インドでは女性の人口の割合が、男性よりも低いという現象が起きている。国連の調査によると6歳未満の男の子1000人につき女の子は914人と、過去50年で最低になっていることがわかった[国連人口白書 2011: 4]。この現象には、インド社会に根強く残る持参金の制度の持参金などを行う男尊女卑の慣習が背景にある。

に発展して寡婦の再婚を禁ずる習慣を生ませるに至った。今ではサティーは都市部では行われていないが、農村部では誰にも言われずにも夫の火葬中に飛び込む女性もいるという。

今でもインドの夫婦の殆どがお見合い結婚である³⁵[Das 2010 : 84]。お見合いといっても彼らは両親によって結婚相手を決められて、結婚式の日までお互いに顔を見られない場合もある。筆者が高校時代を過ごしたインドの寄宿舎高校で2年半もの間、同じ部屋を共有したヒンディー教徒のルームメートは、将来親の決めた相手と結婚すると言っていた。高校時代と言ったら、友人の間で自分は誰が好きかと話が盛り上がる年頃であったが、彼女はまったく異性に興味を持たず勉強ばかりしていた。彼女の家族は代々、インフラ業界の仕事をしており、1人娘の彼女は父の仕事をつぐため学問に勤しんでいた。彼女に恋愛をしたいと思わないのかと聞くと、自分には決められた運命があって逆らう理由が見つからない、両親が選ぶ相手だから間違いはないと納得している様子だった。彼女は現在、アメリカの大学で土木を専攻している。将来会社をつぐ身として自立した女性を目指して学問に励んでいる彼女だが、アメリカの大学に入り、様々な価値観に触れる事によって少しずつ自分の決められた道に疑問を感じ始めたようになったと語っていた。

ここまで述べてきたカースト制度は一見女性差別的で女性の自由を奪い苦しめているように見えるが、カースト制度には民族の温存の面では最大の強みがある。カースト制のもつ強みは、各職業の持っているその広い範囲にわたるネットワークである。各カースト間での関わりが薄い代わりに、カースト内での団結力が生まれた。ヒンディー教では父系の血縁集団という形のつながりが何世代も続く。そのため血縁関係は特定の村や地域を超えて同じ集団の仲間であるという帰属意識を人々の中に植えつける事になった[小西 1981 : 226]。また、婚姻は原則として同一カーストで行われる。そのためジャーティの結束に繋がるのである。結婚を通じて広がった集団は、単にその集団ののみを基盤として他の村や地域につながっているわけではない。その集団が根を張った一定の地域社会は、その集団にとって一種のマーケット市場をもなすことが多い[小西 1981 : 227]。彼らはこのネットワークを利用して就職先を得たり、一緒

³⁵ Arranging an arranged marriage: An auto ethnography on the performance of self while negotiating an alliance in contemporary India by Das, Sreashi, M.A.,

VILLANOVA UNIVERSITY, 2010, 84 pp. <http://gradworks.umi.com/14/73/1473170.html>

に仕事をしたりすることになったのである。

インド各地での都市化現象が進んでいる中、同じカーストのメンバーで誰かが都会ににいるという機会は増えるようになった。たとえ相互に直接の血縁関係はなくとも、カーストは大家族の原理をそのまま広げたようなものである。彼らはいつかどこかで本当の血縁関係を結ぶことになる可能性があるため、彼らはあたかも未来の兄弟や遠い親戚のように考えている。たとえ見ず知らずの人でもジャーティを通じて、喜んで田舎から都会へ出てきた男の人の世話にあたるのである。筆者がインドのムンバイに住んでいたときに雇っていた女中も出身の地域から血の繋がっていない「姉妹(sisters)」を呼びよせ女中の仕事のネットワークを築いていた。彼女らは同一ジャーティ間での密な情報交換や相互援助がみられた。インドの都市化、または都市への人口集中の側面にはこのように村に根を張った伝統的な慣習がかえってそれを支えている。まるで大家族の存在に支えられてきたように人を支えてきた。「そこには、落ちこぼれもいなかったし落ちこぼれも生まれなかった。それだけに人々は、くれぐれもジャーティから追放されることがないようにと、ジャーティ内での規制を忠実に守ろうとしたのである。一見それは不合理なことのように見える。しかし、それは競争の激しい資本主義のような、ときには兄弟をも他人とみなすような弱肉強食的緊張から、人々を解放した。このような互助システムにどっぷりつかって、甘えの構造に身をゆだねていたわけではない」[小西 1981:230]。カースト全体が弱い立場にあったとしても、そもそも制度自体の結果が彼らの存続に関わってくる。職業が選択出来ないと言う面では、女性にとって不自由な面もあるが、その職の技を磨き継続して守っていくという面では強みなのである。特に、最近是他国からの物の輸出入が活発に行われている今、その波に洗われて伝統的な本来の職業がなりたたなくなってしまうている。例えば、インドの伝統民芸である工芸職人などは、絵描きは安い印刷された絵に追われ、紙すき工場では大量生産された製品に市場を奪われている状況にいる。その他の職を奪われた職人は農業で生計をたてている。「近代的」な眼からして不都合な慣習にみえようとも、彼らは弱い立場にあるがゆえに、かえってこの制度に身をおき、結婚を通して本来の文化的独自性を保持しようとしたのである。カーストと女性に関する歴史研究家のラター・マニ³⁶はアメリカに住んでいるインド系移民のコミュニティについ

³⁶ Lata Mani, "Gender, Class and Cultural Conflict: Indu Krishnan's Knowing Her Place," in *Our Feet Walk the Sky: Women of the South Asian Diaspora*, The Women of South Asian Descent Collective, eds. (San Francisco: Aunt Lute Books,

てこう述べている。

「19世紀以来、伝統と近代という問題は女性の生身の、あるいは比喩上の身体を巡って論争されてきた。だから驚くべき事ではないが、女性は新世界にうまく対処するという重荷を不釣り合いなほど多く負わされている。女性の行動や欲求は現実のものであれば想像上のものであれ、南アジア系コミュニティの中で起こる不安とか、幸福論を測るリトマス試験紙となる。たとえば女性がデートすることに対する恐怖である。... 中略... 古い祖国のしきたりを維持したりするように要求されるのは女性なのである。」カースト制は、1947年4月29日インド憲法で禁止³⁷されているがカースト強みで現在もインド社会に根強く残っている。近代化によって、カースト制が問題視されるようになったが、この近代的な流れによってヒンディー教の女性は、カースト結婚を通じてジャーティの中で生き残りを図っている結果となっている。

4. 家族と自己形成

1993), p35.

³⁷ インド憲法は、第17条において不可触民制を禁止し、カーストによる差別も禁止している。しているそれ以外にも不可触民への保護条項、違反者への処罰等を含ませてもいる。

第17条（不可触民制の廃止）：不可触民制は廃止され、いかなる形式におけるその慣行も禁止される。不可触民制より生ずる無資格を強制する事は、法律により処罰される犯罪である。

第341条（指定カースト）：(1)大統領は、公示において州または連邦直轄地に関し、州においては当該州の知事と協議した後、カースト、人種またはトライブ若しくはカースト、人種またはトライブの内のグループを、この憲法にいう当該州または連邦直轄地における指定カーストとみなすことができる。国会は、法律において、(1)項の規定に基づいて発せられる公示により規定される指定カーストの表につき、カースト、人種またはトライブ若しくはカースト、人種またはトライブ内のグループをこれに追加し、またはこれから削除することができる。この場合においては、前記の場合を除き、(1)項の規定に基づいて発せられる公示は、これに続き公示によって変更してはならない。[インドの憲法：21世紀「国民国家」の将来像 2006：27]

世界のあらゆる場所で生きている多くの女性たちにとって、母親とのつながりとは自分の育った文化の場所、母国との関係と似ている[ナラヤーン 2010:23]。本論文を執筆する際に行ったアンケートで、「あなたの人生に最も影響を与えた女性是谁か」という質問に対し、31人中30人の女性が「母親」と答えた。その理由として、「理想の女性であること」(18名)、「生活の中で、社会の倫理や規範を教えてくれた」(7名)、「家族の中で一番の理解者」(3名)というものであった。母親も、同時に母なる文化もあらゆる矛盾したメッセージを娘たちに伝える。黙っておとなしくしているように娘に要求するときでさえ、女性に自分や度胸を授け、自己主張を促すという明らかに矛盾したメッセージだ。大人の女の問題はたいてい小さい子供には隠されているが、大人に近づくにつれそれがおもむろになってくる。母親は女性の大先輩であり、これから彼女らは経験しうる運命も自ら経験をして知っている。筆者が通っていた寄宿舎で一緒だったルームメートは宗教や家族の話をたくさんした。彼女は自分の運命を理解するために母親とたくさん話し合いと重ねたそう。母親への愛情や尊敬の念もある一方で、社会では非常に大きな組織として動くヒンディー教のカースト制度に疑問を持つ事は教育を受ける段階で必然的に起こる事だ。将来、自分の結婚相手は両親によって決められようが、心の底に疑問を感じていても愛する母を裏切るような思考はいっさいしないようにしているし、自分はこの文化の下に生まれたことに間違いはないと語った。

インド人フェミニストであるウマ・ナーラヤンは自信と母親の関係について以下のように述べている。「私の母も私が育った特定のカーストに属する中流階級のインド人の母親たちも娘が教育を受けるのは将来、経済的に自立するために必要で、母親世代が当然身につけていた生きるすべを取得できるのでよいことだと思っており、とにかく教育熱心であった。だが同時にそうやって奨励してきたことがもたらす影響には批判的であった。母親たちは娘たちが本で得た知見をもって、社会のルールや人生の規範に疑問を持ったり主張しはじめたりするのに神経を尖らせていた。私たちがキャリアアップを結婚の障害ではなく、人生を充実させるのに必須な出来事をとらえることを懸念していた。娘たちが自立して自己主張するようになれば、よき「インド人女性」に必須な謙虚さ、しとやかさ、柔和さが欠けてしまうと気をもんだのである。」

以上に触れたように、インド人女性は家庭内の人間関係でもそれぞれ独立した人格として厳しく育てられてきたのである。だからこそ、カースト制度のような国外からみ

たら理不尽にみえるような慣習も、その強みの部分を重視し、それぞれの社会で生きていくために受け入れながら自分の人生においての大事に事柄を決めてきたのである。母なる文化を自分なりにとらえ、自分なりの視点をもつことは母親を理解することと同じで、その文化の中で生きることには意義をもてる。母親や母なる文化からどんなに離れていても、たとえその教えに異議をもうしたてようと、インド人女性は彼女たちなりに多大な影響を及ぼした母親と母なる文化のともにあるのだ。

5. 身体の帰属意識

第2章で登場した海野のダイエットの周辺のダイアグラムを再度提示して、インド人女性の身体の社会の関係を追求したい。

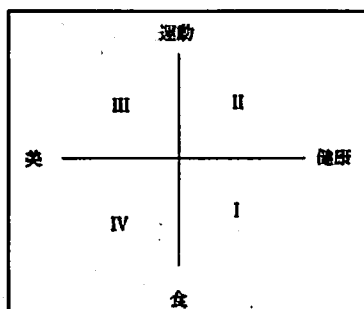


図1：ダイエットの周辺

1) 食 □ 身体の内側	2) 健康 □ 生理的身体性
3) 運動 □ 身体の外側	4) 美 □ 社会性、文化性

表2：右下から逆回りに表示

([ダイエットの歴史 1998：29]を参考に筆者作成)

これまでインド社会とダイエットの関係を、食（インド料理）、健康（アーユルヴェーダ）、美（西洋的なハリウッドスターの人気）、運動（ヨガ）に焦点をあてて探ってきた。経済成長が著しいインドでは、ダイエットの普及はインド人女性にとって自分の主体性、女性性、身体性をあらたまって考える電撃的な出来事であった。それぞれの所属する社会の中で主体性、女性性、身体性について矛盾する規範が同時に働く場におかれ、どちらの規範に従っても他方から非難されるという引き裂かれた状態のなかにある。それらが女性たちに生き苦しさをもたらしダイエットという行為を導いたと考えられる。果たして身体は誰のものなのか、誰のためにダイエットをしているのか。社会と個人の中に引き起こる葛藤の中に見いだす事ができる。それはもちろん自分のためかもしれないが、結果的に社会の規範のもとで物事を決めることにいきついた。

インドにおけるダイエット・ブームの社会的現象はインドの近代化を促進するきっかけの一つになっただけではなく、逆により一層インドの慣習を際立たせる結果へと導いた。その背景には、歴史的慣習のカースト制度がある。この慣習は低層のひとたちばかりでなく、中間層、富裕層の中でもしっかり存在する。彼女たちがダイエットをするのは、同じジャーティまたは自分が所属する社会の中で生き残るため手段であり、自身の帰属意識を表す行動の1つでもあったのだ。

第4章 結論

近年、インド人女性の間で流行しているダイエットは近代的なものであり、都市化の現れであることが言える。1960年代にアメリカで起きたダイエット・ブームは映画や食品を通じて徐々にインドに広まっていった。当初は、インド人口の一握りを占める富裕層を中心に起きていたブームが、急激な経済成長とともに拡大した中間層の社会現象となった。この社会の変化とともに、女性のライフスタイルも変わってきた。ダイエットのような身体性や女性性また主観性に影響をもたらす動きは徐々にインド人女性の文化的枠組みを広げていくことになった。社会の移り変わりを食や美意識の変化の中から、間接的にも直接的にも受ける結果となった。特に、これらの「食」、「美」、「健康」や「運動」の領域は、彼女らの文化的背景を反映する。インドのインドではヒンドゥー教徒の割合が人口の80パーセント以上をしめていることもあり、宗教は違っても身体に関する考え方や社会の規範はヒンドゥー教徒の影響を受けている。一見非合理にみえることカースト制度の慣習もそして、内婚制によって同乗の社会は結束し、また婚姻を通じて村々に張られた広域にわたるネットワークは安定した通商圏を彼らに約束するものであった。

本論では、インド社会と女性を中心に女性の個人的、社会的な生き方を形づける多くの規範や慣習や伝統、そしてダイエットという新たな発展や変動は女性の人生の選択に決定的な影響を与えるという認識を明らかにした。しかし、インドにおける個人と社会との間に引き起こる葛藤は、私たちのまわりでも起きているのだ。いまだに続くダウリー制度や親の決めた結婚に縛られた女性への暴力にはなじみがないかもしれないが、自分たちの文化の女性も婚姻や家族関係におけるくびきや暴力とは無縁ではない。被害者でいる屈辱や、助けを求めたり虐待関係から逃れたりする際に大きな壁となるのは物質的、社会的、文化的に多様な構造とも無縁ではない。しかし、日本も他の国も同様にこれらの社会現象を乗り越えいまいにいたっている。カースト制度のような文化の枠にとらわれる事は良いか悪いかはべつとして、このように歴史的慣習が両者の視点から思索され、一般的な認識として歴史的・政治的文脈で進めば、女性の活動は世界のさまざまな地域で発

展して盛んになるだろう。今後この女性と社会の狭間を研究する学問が、ただの西洋化の潮流の中でうまれてしまいそうな、そのかすかな女性の声をひろい、その声が普遍化されることによって女性が人生観を広げてより一層自らを形づけるものとして発展することを期待する。

Appendix

Internet Based Survey on Indian Society and Diet

My name is Kayo Horie. I am a 4th year student at the University of Tsukuba in Japan, majoring a Cultural Anthropology and International Relations. I lived in India for 5 and a half years. That's how I became interested in Indian society and its diet. The aim of this research is to examine the dietary differences in states and cultures as well as how individuals think about dieting.

This survey may seem like a long one due to the multiple choices; however, the approximate time to finish this survey is only about 20 minutes. There is no time limit to this survey so please do take your time to fill this out. I truly appreciate your participation. You may also look at summery of the survey as graphs and charts once you finish answering them all.

Notice:

This survey is for my research purposes only. Participation is voluntary. Your personal information is in no way tied to this information as responses are anonymous. If at any time you choose not to participate in this study, or wish to end your participation in this study, simply inform the researcher and your response sheet will be destroyed. Thank you for your time and consideration.

* Survey consists of 55 questions. It takes approximately 20 minutes to fill out. There are 6 parts to the survey: Basic information, Regional characteristics, Religious characteristics, Influential factors, Physical characteristics and Dietary characteristics. You may go back to the questions if necessary.

Basic Information

(1) Age 年齢

(2) Occupation 職業

1. student 学生
2. worker 社会人
3. part-time アルバイト
4. none of above その他

(3) List as many factors that influenced you as who you are

自分に影響を与えた要素を挙げよ

(4) Do you live with your family now?

現在は家族と一緒に住んでいるか

Regional Characteristics

(5) Place you were born 出生地

1. Abroad (other country) 海外
2. Andhra Pradesh アーンドラ・プラデシュ州
3. Arunachal Pradesh アルナーチャル・プラデシュ州
4. Asam アッサム州
5. Bihar ビハール州
6. Chhattisgrah チャッティスガル州
7. Delhi デリー
8. Goa ゴア
9. Gujarat グジュラート州
10. Haryana ハリヤナ州
11. Himachal Pradesh ヒマーチャル・プラデシュ州
12. Jammu and Kashmir ジャム、カシミール
13. Jharkhand ジャールカンド州
14. Kerala ケララ州
15. Medhaya Pradesh メディヤ・プラデシュ州
16. Maharashtra マハラシュトラ州

17. Manipur マニプール州
18. Mizoram ミゾラム州
19. Nagaland ナガランド州
20. Orissa オリッサ州
21. Punjab パンジャビ州
22. Rajasthan ラジャースタン州
23. Sikkim シッキム州
24. Tamil Nadu タミル ナードゥ州
25. Tripura トリブラ州
26. Uttar Pradesh ウッタール・プラデシュ州
27. Uttarakhand ウッタラカンド州
28. West Bengal 西ベンガル州
29. Others その他

(6) Place you grew up the longest

一番長く滞在した場所

1. Abroad (other country) 海外
2. Andhra Pradesh アンドラ・プラデシュ州
3. Arunachal Pradesh アルナーチャル・プラデシュ州
4. Asam アッサム州
5. Bihar ビハール州
6. Chhattisgrah チャッティスガル州
7. Delhi デリー
8. Goa ゴア
9. Gujarat グジュラート州
10. Haryana ハリヤナ州
11. Himachal Pradesh ヒマーチャル・プラデシュ州
12. Jammu and Kashmir ジャム、カシミール
13. Jharkhand ジャールカンド州

14. Kerala ケララ州
15. Medhaya Pradesh メディヤ・プラデシュ州
16. Maharashtra マハラシュトラ州
17. Manipur マニプール州
18. Mizoram ミゾラム州
19. Nagaland ナガランド州
20. Orissa オリッサ州
21. Punjab パンジャビ州
22. Rajasthan ラジャースタン州
23. Sikkim シッキム州
24. Tamil Nadu タミル ナードゥ州
25. Tripura トリプラ州
26. Uttar Pradesh ウッタール・プラデシュ州
27. Uttarakhand ウッタラカンド州
28. West Bengal 西ベンガル州
29. Others その他

(7) If not listed above, which country?

上記に挙げられていない地域の場合、記載せよ

(8) What is the name of your city

出生地の地名

(9) Do you think about your city

貴方の町は都会か田舎か

-urban area 都会

-rural area 郊外

(10) and Years spent there

過ごした期間

(11) Mother tongue

母国語

(12) Other languages you speak

その他に話せる言語

If not listed above, what is it

上記に記載されていない、その他に何の言語があるか

Religious Characteristics

(13) Religion

宗教

- Hindu ヒンディー教
- Muslim イスラム教
- Christian キリスト教
- Sikh シーク教
- Buddhist 仏教
- Jain ジャイナ教
- Agnostic 不可知論者
- Not one particular 特になし
- None of above 上記にはない

(14) How devoted/faithful you are to your religion

貴方はどれだけ宗教に熱心か

(15) How much your lifestyle is attached to your religion

貴方の生活と宗教はどれだけ密着しているか

(16) What aspects of your lifestyle your religion has influenced

ライフスタイルのどのあたりに宗教が影響したか

(17) Who is your religious leader, if any

貴方の宗教のリーダーは誰か

(18) Is it necessary to wear traditional dress in your initial society

貴方の生まれ育った社会で伝統的な服装を着る必要はありますか

(19) If yes, on what occasion

こういった機会を着ているか

(20) Does your initial society have a ideal body figure to wear traditional dress

貴方の出身の社会では、その社会の理想的な体型はあるか

(21) If yes, what kind

そういった体型か

(22) How is it different from where you are now, if applicable

現在の社会とはどう違うか

(23) Do you diet for religious reasons

宗教的理由でダイエットをするか

(24) If yes, what kind

どういったダイエットか

(25) Do you exercise for religious reasons

宗教的な理由で運動をするか

(26) If yes, what kind

どういった運動か

Influential Factors

(27) How does your culture/religion/society view about physical appearance

貴方の文化、宗教や社会は体型についてどう考えているか

(28) How do you view about physical appearance

貴方は体型についてどう思っているか

(29) Who is your favorite female person

貴方の好きな女性は誰か

(30) How were you most influenced by your favorite person

その人からどういった影響を受けたか

(31) Are you interested in celebrities (including both indian movie stars and foreign stars)

セレブリティに興味があるか

If yes, Who is your favorite celebrity and why

どのセレブリティが好きか

(32) Whom would you be if you could be different woman (can choose more than one)

もし違う女性になれば誰になりたいか

(33) Who influenced your lifestyle the most and Why

誰が一番自分のライフスタイルに与えたか

Dietary characteristics

(34) Vegetarian

草食主義か

(35) Are you comfortable with your body

貴方は自分の体に自信をもっているか

If no, why

いいえ、であればどうしてか

If yes, why

はい、であればどうしてか

(36) Were you ever on a diet

ダイエットをしたことがあるか

If yes, Why did you start

なぜダイエットを始めたのか

If yes, When did you start (be specific, age)

はい、であればいつ始めたか

When dieting, where do you get information from to start

ダイエットをするときどこから情報を得たか

Were you successful? In which attempt

ダイエットは成功したか、どのくらいかかったか。

How many times have you tried dieting

ダイエットに何回挑戦したか

(37) What dietary changes did you undergo while on your diet

ダイエットをするうえでどういった食生活の変化があったか

When dieting, how often do you eat,

ダイエットをしているとき、一日に何回食べるか

(38) Do you cook

料理はするか

If yes, What kind of food

はい、であればどういった料理か

(39) What do you often eat

なにをよく食べるか

(40) What is your favorite dish

貴方の好きな料理は何か

(41) When dieting do you exercise

ダイエットをする際、運動をするか

(42) If yes, When dieting how do you exercise

はい、であればどのように運動をするか

If yes, what do you exactly do

はい、であれば具体的にどんな運動をするか

(43) How often do you exercise

どのくらいの頻度で運動をするか

(44) Have you done Yoga before?

ヨガをしたことがあるか

(45) Have you tried aayurveda before

アーユルヴェーダをしたことがあるか

(46) Have you been to beauty-treatment clinic/spa treatment/beauty salon

美容サロンやエステにいったことがあるか

If yes, how often do you go?

はい、であればどの頻度いくか

Physical Characteristics

(47) If you don't mind answering, what is your body figure like

もし差し支えなければ、体型を記載せよ

(48) Who has the ideal body that you admire

誰が貴方か理想とする体型を持っているか

(49) Did you ever change your diet according to fashion trends

ファッションの流行に乗って食生活を変えたことはあるか

(50) How often do you go shopping to buy clothes and cosmetics

どのくらいの頻度で洋服や化粧品の買い物へいくか

(51) Are you exposed to foreign media

海外のメディアに触れているか

(52) Do you read foreign fashion magazines

海外のファッション雑誌は読むか

Are you influenced from them

それらから影響を受けているか

(53) Have you been to foreign countries

海外へ行ったことがあるか

If yes, where

どの国か

(52) Which country are you influenced the most, if it's your country please state

どの国からもっとも影響を受けたか

(54) Your ideal country (in terms of beauty, dieting and exercise)

美や食生活の面でどの国が理想的か

(55) In your opinion, what effect does your society have in terms of body image and decision involving dieting?

個人的に、貴方の社会はボディイメージとダイエットをする際の決定にどういった影響を与えているか

If any farther comment you have, please list

その他にコメントがあればどうぞ

If you don't mind listing, who asked you to volunteer in this survey

誰に頼まれてアンケートをしたか

If you don't mind listing, I would like to contact you if I have farther questions.

Please write your e-mail address if you have one. 連絡先

参考文献

<英語文献>

Anderson-Fye, E. P.

2004 “A ‘Coca-Cola’ shape. Cultural change, body image, and eating disorders in San Andres, Belize”. *Culture, Medicine, and Psychiatry*, 28, 561-595.

Radhika Batra

2007 “Beauty and Body dissatisfaction experienced by young Indian women exposed to foreign printing advertisement found in International fashion Magazines targeted at women.”

<日本語文献>

石井政之・石田かおり

2005 『見た目の依存の時代』 pp31-287、原書房。

ウマ・ナーラーヤン

2010 『文化を転位させる —アイデンティティ・伝統・第三世界フェミニズム』 pp2-247、法政大学出版局。

伊藤武

1994 『身体にやさしいインド』 pp15-141、国宝社。

井原成男

2006 『食と身体の臨床心理学』 pp24-41、山王出版。

伊藤公雄、樹村みのり、國信潤子

2002 『女性学・男性学』 pp12-35、有斐閣。

片瀬 一男

2003 『ライフ・イベントの社会学』 pp29-58、世界思想社。

海野 弘

1998 『ダイエットの歴史—みえないコルセット』 pp28-38, pp40-85, pp233、新書館。

加藤まどか

2004 『拒食と過食の社会学』 pp166-169、岩波書店。

加藤秀俊

1989 『食の社会学』 pp5、文藝春秋。

辛島昇

1992 『読んで旅する世界の歴史と文化 インド』pp74-91, pp152-182、新潮社。

倉地克直、沢山美果子

2008 『働く事とジェンダー』 pp17-19、世界思想社。

栗田靖之、長野泰彦、永ノ尾信悟、南真木人

1991 『ヒンディー世界の神と人』 pp7、関西テレビ放送。

小磯千尋、小磯学

2006 『世界の食文化—8 インド』、東京印書館。

小西正捷

1981 『多様のインド世界』、三省堂。

コルバン, アラン

2010 「身体の歴史〈3〉20世紀—まなざしの変容」

原書名：Histoire du corps,3 Les mutations du regard(Courtine, Jean Jacques)、

藤原書店。

小谷汪之

2001 『図説世界文化地理大百科 インド』、朝倉書店。

坂下幸三

1991 『過食の病理と治療』 pp68-72、金剛出版。

近藤英男、新垣正浩、高橋健夫

2000 「新世紀スポーツ文化論」 pp5-23、タイムス。

ジェーンロス、斎藤隆

1996 「食べすぎてしまう女たち—「愛」の依存症」 pp78-82、講談社。

原書名：When food is love.

社団法人 全国食糧振興会

1986 『インドの食生活に学ぶもの』、農山漁村文化協会。

田中於菟弥

1987 『サリーの女』 pp16、評論社。

デボラ ラプトン

1999 『食べることの社会学』

原書名：“Food, the Body and the Self”、新曜社。

鶴田 静

1997 『ベジタリアンの世界』275—295pg、人文書院。

波平恵美子

2005 『からだの文化人類学—変貌する日本人の身体観』、大修館書店。

野々山久也

2006 『家族ライフの社会学』、ミネルヴァ書房。

ビパン・チャンドラ

2001 『近代インドの歴史』、山川出版社。

マーヴィン・ハリス/板橋作美

2001 『食と文化の謎』、岩波現代文庫。

目黒依子

1987 『個人化する家族』、勁草書房。

ルイ・デュモン/竹内信夫

1997 『インド文明とわれわれ』、みすず書房。

山田昇

1999 『女性と社会 女性エンパワメントを目指して』、世界思想社。

ワルター・ヴォンダーエイケン、ロン・ヴォン・デート

1997 『拒食の文化史』

原書名：“From Fasting Saints to Anorexic Girls”pp32-48、青土社

<ウェブサイト>

環太平洋戦略研究センター

2009 『インドの経済成長』環太平洋ビジネス情報 RIM 2009 Vol.9 No.33。

<http://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/report/rim/pdf/2735.pdf> (2011/10/27 参照)

経済協力開発機構

2007 『OECD 発表データ：インドの成長率』。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ecodata/pdfs/k_shihyo.pdf (2011/10/27 参照)。

World Factbook

2011 “India Economy 2011”.

http://www.theodora.com/wfbcurent/india/india_economy.html (2011/10/27 参照).

Reader's Digest

2010 “Global Poll_A Look at Weight Around the World”

<http://www.rd.com/health/global-poll-a-look-at-weight-around-the-world/>

(2011/10/27 参照).

Deutsche Bank Research

2010 “The middle class in India”,

http://www.dbresearch.de/PROD/DBR_INTERNET_DE-PROD/PROD0000000000253735.pdf. (2011/10/27 参照).

国際協力銀行

2011 「知っておきたい進出先の留意点～中国・インド・インドネシア・タイ・フィリピン・ベトナム・マレーシア～」、金融ジャーナル。

<http://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&ved>

(2012/1/12 参照)

<雑誌>

Transit

2011 『美しきインドに呼ばれて』付録 pp6、講談社 MOOK。

The Taj

2004 “Concept of Beauty”, Silverpoint Press.

<テレビ>

NHK 海外ネットワーク

2011 「人口 70 億時代」2011 年 10 月 29 日放送。

Summary

Indian Society and Diet

The purpose of this study is to examine the relations between Indian society and dieting. The study focuses on the dieting experienced by young Indian women in the middle class and the wealthy class, and how Indian women came to have the idea that thinner bodies are better looking than the chubby figure, which was historically thought to be attractive in India. This paper highlights the difference in cultural backgrounds of young Indian women. With specific examples of religious and social movements in India, this paper reveals whether one's body belongs to society or to oneself. In order to investigate the percentage of females practicing dieting, the survey was conducted online and 31 responses were collected. The object of this study has been to understand these sensitive and personal issues from the eyes of young Indian women who are active members of the global environment and well versed in international fashion trends. I focus on the relationships between conducting dieting, and the larger society to analyze whether the act represents a sense of belonging to the society through the physical changes that Indian women go through.

Dieting often seems only a matter of eating habits and maintaining a healthy body; however, dieting and culture are closely interrelated, because the concept of "beauty" has historically been a product of culture. Recently the world's ideal body figure has become an integrated European-style model that tends to be oriented toward the ideal of being fair, tall and thin. Therefore, these singular standards of "beauty" have penetrated into Indian society, while society stubbornly tries to remain the traditions that society's elder females have been forming and bestowing unto their children. Furthermore, this conservative segment of society does not take kindly to the idea that they have been living their life the wrong way. Thus, any sudden changes in Indian society are often dismissed as westernization and globalization, and society is deemed to defend conservative culture, while accepting only the most gradual of change, even in the liquidity of history. Behind the growing numbers of Indian women who diet like this are three factors, the economic liberalization policies of the 1990s, the increase in women's social advancement, and the economic growth of the middle class.

Indian people's lives have changed drastically since the 1990s, when they entered a period of economic growth. Young women in the wealthy and middle classes have been especially changing their thoughts and values towards "beauty", "food", "exercise" and "health." Dieting and fitness are

especially popular for women in their 20s to mid 30s. The U.S. family magazine, Reader's Digest, conducted a survey on 16 countries, and India showed a strong desire for dieting. This result indicates that they are the second highest rated country in terms of the need to diet in the world.

In comparison to others, Indian females develop a sense of inferiority and tend to think that their looks are worse than others. In particular, for many years a fuller body "beauty" had been an attractive figure, these changes in India's aesthetics is remarkable. With the movement of dieting that is aiming for a thin body, Indian society's "beauty" seems to have been subvert. By both consciously and unconsciously exposing themselves to different values through foreign films and magazines, Indian women were found to have been led to revalue their own body. In the 1960s, the diet and fitness boom occurred in the United States, and it gradually spread to India, leading young Indian women to long to have an ideal Western body. Since around 1980, American celebrities have adopted yoga and ayurveda, a traditional Indian exercise and theory, as a method of dieting, and India has since begun revising their own methods of dieting.

The second chapter deals with the overview of the history of dieting from a etymological and medical standpoint. The word, "diet" originated from ancient Greek, and meant "lifestyle". The brief background of how the

meaning of “dieting” became what it is today is explained in this chapter.

In Chapter 3, based on interviews and survey result, the relationship between changes in diet and society was analyzed, and the presence of dieting experiences was measured, and influential factors of dieting were revealed. In order to find out how Indian women came to have such a diverse dieting background, the history of religion and regional characteristics were also explained in this chapter. Although several religions were introduced into or developed in the region in the past, such as Buddhism, Islam, Christianity, Zoroastrianism, Jainism and Sikhism, 80% of the Indian population remains Hindu today. The reason why Hinduism is so strong in Indian society is the caste system. The caste system was officially banned in 1947 by the government; however, it still remains in India. This strength and stability is due to the fact that the caste system works as a predominant form of social capital in India. However, the caste system may also seem to be the cause of suffering for women in rural areas as well.

These overlapping conditions of women and a fairly difficult situation in times of changing social norms have led them to diet. If subjectivity and feminism exist at the same time, conflicting norms about the body are generated, and so women are caught in the state of being torn between following their own desires and respecting traditional social norms.

In my conclusion, I discuss the validity of my original hypothesis, review my data, the significant results, the limitations of the current study, and proposals for future research in similar topics. Furthermore, we discuss whether or not an Indian woman's body is considered to be subordinate to her individual decisions, or is based on the norms of society. My evidence suggests the latter.

謝辞

この研究論文を執筆するにあたり、非常に多くの方々からご指導、ご鞭撻を受けた。この場を借りて、感謝の意を表明したい。

筆者の指導教員である関根久雄教授にはお忙しい中、何度もご指導をして頂いた。2008年の大学1年次に関根教授の授業を受けて以来、文化人類学に大変興味を持ち、2009年の2年次でアメリカの大学に留学をする前に関根のゼミに入りたいと相談し、帰国後の2010年9月に関根ゼミに参加した。関根教授には、本論の執筆の相談以外にも大学生活における進路相談にも心から親身になってお話を聞いて下さり、感謝しきれないほどたくさんお助け頂いた。どんなに苦しいときも先生のゼミに出席するたびに元気になる自分がいた。関根教授は自分でも救いようのないように思える自分に希望や勇気を与えて下さった。

また、本論文で匿名質問紙法を用いてこの研究を進めるにあたり、多くの方に55間にもおよぶアンケートとインタビューに協力して頂いた。筆者が中学と高校時代を過ごしたインドの友人と彼らの友人および本大学のインド人留学生、計31名の回答者に感謝したい。卒業論文の作成にあたり、相談にのって下さった橘田正造教授と大学の友人にも感謝する。何気なく橘田教授や友人と話している間に自然と自分の考えが纏まったり、新しいアイデアが浮かんだりした。いつも私を気にかけて下さった一年次でクラス担任だった高橋伸先生にも感謝したい。また、本学の筑波大学付属図書館の情報サービス課相互利用係の村尾真由子さんには文献のお手伝いをして頂いた。彼女の助けなしには適切な文献を探す事が出来なかったと思う。質問紙法と英文サマリーの校正をしてくれた茨城県立土浦第3高校の英語教師助手 (ALT)のダニエル・プタワラ先生にも感謝する。最後に、私の大学生活を支えてくれた感謝したい。私の暖かい家族がいてくれたおかげで、こんなにも濃い3年半を過ごす事ができた。特に母からは卒論に関するたくさんのインスピレーションと助言を頂いた。

卒業論文を今ここに完成することができたのは以上に述べた方々の温かいご指導をあったからだと思う。本当にありがとうございました。